Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学部門　77　pp. 69 ～ 103　2022

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ(9)

―広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」を事例として―

外　池　　智
（秋田大学教育文化学部）

Study about inheritance of telling war experience (9)
- Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

Abstract

This study is in published studies on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving working from2015, continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the2009 fiscal year,2012 year telling.

Age of war after World War II 71 years have passed, and talk about the experience of war if 10 -year-old, no longer the population total population 8%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive should be called "peace education of the next generation" so to speak, practice is ever-changing and expanded.

Nagasaki has been approached from the city of Hiroshima last year continue to be tackled from fiscal year 2012(Heisei 24), such circumstances "a-bomb survivors tradition" and 2014(Heisei 26) year " Family survivors "and take" Exchange witnesses ".

Key Words: Study about inheritance of telling war experience, Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend", Nagasaki a-bomb experience about (exchange evidence) promotion project

１．本研究の目的

本研究は，2009（平成 21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究[1]，2012（平成 24）年度から推進している戦争体験の「語り」の継承に関する研究[2], 2015（平成 27）年度から推進している継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究[3] の継続研究であり，さらに 2018（平成 30）年度から取り組んでいる地域の継承的アーカイブと学習材としての活用に関する研究[4] の一端を発表するものである。

戦後 76 年の歳月が経ち，戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に 10 歳とすれば，もはやその人口は全人口の 5％以下となった。こうした状況の中，あの貴重な体験や記憶を残し, 継承していこうとする試みが続いている。また教育現場においても，直接的な戦争体験の「語り」ではなく，そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育[5]」と呼ぶべき実践が次々と展開されている。

本稿では, 今回で 7 回目となった秋田大学での講話で, 広島市「被爆体験伝承者」である佐々木佐久子氏（講話時 71 歳）と長崎市「交流証言者」である水谷遥氏（講話時 20 歳）の Zoom による「語り」を取り上げたい。これまでの分析と同様に，文字起こしによるプロット毎の「語り」の時間と文字数からの量的分析，また聴講者からのアンケート結果（自由記述）からの質的分析により検討していきたい。

２．これまでの広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」「交流証言者」講話

本研究では, まず戦争体験の「語り」の継承について, 以下の様な取り組みを取り上げてきた。

本研究では，第 1 期生が誕生した 2015（平成 27）年より広島市「被爆体験伝承者」を，さらに翌 2016（平成 28）年度からは，長崎市「家族証言者[6]」を実際に秋田大学にお呼びして，講話をしていただいている。これまでお呼びした講話者は，以下の通りである。

広島市「被爆体験伝承者」については，これまで 2019（令和 1）年度の石綿浩一氏が唯一の第 2 期生で, 他の方は全て第 1 期生であった。

Akita University

資料１　これまで取り上げてきた戦争体験「語り」の継承プログラム

	事業名	事業主体	期間
広島（3件）	・「被爆体験伝承者」養成プロジェクト ・「ヒロシマ　ピースボランティア」事業 ・「原爆遺跡フィールドワーク」	広島市市民局 広島平和文化センター 原爆遺跡保存運動懇談会	2012- 1998- 1990-
長崎（3件）	・「青少年ピースボランティア」事業 ・「被爆体験記朗読事業（朗読会 / 朗読ボランティア育成・派遣）」 ・長崎市「『語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）』推進事業」	長崎市被爆継承課平和学習係 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 長崎市被爆継承課平和学習係	2002- 2011- 2014-
沖縄（4件）	・「ボランティア養成講座」 ・「子や孫に語り継ぐ平和のウムイ事業」 ・「次世代プロジェクト」 ・「南風原平和ガイド養成講座」	沖縄県平和祈念資料館 沖縄県平和祈念資料館 ひめゆり平和祈念資料館 南風原町	2004-2006 2012-2013 2002- 2007-
国立市（1件）	・「くにたち原爆体験伝承者」育成プロジェクト	国立市市長室平和・ダイバーシティ推進係	2014-2018

資料２　秋田大学にこれまでお呼びした講話者

（敬称略）

年度	広島市「被爆体験伝承者」	長崎市	
		家族証言者	交流証言者
2015	髙岡昌裕（36）		
2016	楢原泰一（40）	佐藤直子 (52)	
2017	藤井幸恵（73）		松野世菜 (19)
2018	山岡美知子（67）	平田周（59）	
2019	石綿浩一（55）		田平由布子（26）
2020	清野久美子（62）		中島麗奈（19）

・（　）内は，講話時の年齢

そして，7 年目となった今回の講話では，新型コロナウィルスの影響で外部の方を学内にお呼びすることができない状況だったので，前回に続き Zoom によるオンラインで開催した。特に，広島の佐々木氏は秋田大学での講話では初めての第 3 期生である。これまでの分析と同様に，文字起こしによるプロット毎の「語り」の時間と文字数からの量的分析，また聴講者からのアンケート結果（自由記述）からの質的分析により検討していきたい。

３．講話の日程と講話者の略歴

2021（令和 3）年度は，7 月 22 日（木）に講話を実施した。主な日程は以下の通りである。講話時間は，例年であれば基本的には広島市「被爆体験伝承者」講話は 1 時間，長崎市の場合は 40 分程でお願いしているが，今回も Zoom での開催であるので，視聴者である学生の負担を考慮して，前者は 45 分程，後者は 30 分程でお願いした。

13：00～13：05　参加者の状況確認
13：05～13：20　基調報告（外池　智）
13：20～14：00　広島市「被爆体験伝承者」講話（佐々木佐久子氏）
14：00～14：15　質疑応答
14：15～14：45　長崎市「交流証言者」講話（水谷遥氏）
14：45～15：00　質疑応答

講話実施の順に，まず広島市「被爆体験伝承者」の佐々木佐久子氏の略歴について取り上げる[7]。佐々木氏は，1950（昭和 25）年広島市生まれで，講話時 71 歳。母が被爆者で被爆 2 世である。2000（平成 12）年に大腸がんに罹患した事がきっかけで，現在までがん患者さんへのサポート活動をしている。2001（平成 13）年には夫が食道がんに罹患した。夫が生後 2 週間目に爆心地から 1 キロ余りのところで被爆していた事から原爆症と言われ，肺がん・胃がん・脳腫瘍・肝臓がん等，多重がんで，8 年半の闘病の末，64 歳で亡くなった。夫が亡くなる 3 日前に「戦争さえなければ・・・」とポツリと言った事，さらに，亡くなった後に庭中につゆ草が咲いており，冬になって刈り取ったところ「被爆量が分かる」と書いた小さな札が出てきた事から，佐々木氏は夫が亡くなるまで放射線の恐怖の中で過ごしていた事を知り愕然とした。この夫の原爆症による罹患，闘病から，自らが被爆体験伝承者となって，夫の気持ちを多くの方に伝えたいと勉強を始めた。秋田大学での講話では，初めての第 3 期生である。

戦後 5 年目に産まれた佐々木氏が，物心ついた頃には広島市内には原子爆弾による様々な痕跡がまだ残っていた。また，父方の祖父は爆心地から 800m のところで建物疎開中に被爆し，8 月 9 日に祖母の腕の中で亡くなったと言う事をずっと聞かされて育った。

伝承者育成事業の中で，伝承したのは竹岡智佐子氏の体験談である。当時 17 歳だった竹岡さんは，陸軍病院の看護師だった母を探して市内を 1 週間余り歩いた。その時の体験談とその後の活動，そして竹岡さんの平和への切なる想いをお伝えている。

Akita University

次に，長崎市「交流証言者」の水谷遥氏の略歴について取り上げる[8]。水谷氏は，2000（平成12）年長崎市生まれで講話時20歳，長崎純心大学子ども教育保育学科3年である。2017（平成29）年の高校2年生の春に，友達と偶然参加した青少年ピースボランティアの際，担当の方が長崎市「交流証言者」の担当をしており，その交流会に誘われ参加した。その際，6人の被爆体験者のお話を聞いたが，その中に後に自身で「語り」を継承する事になる池田道明氏もいた。高校2年生の秋より講話を開始し，2018（平成30）年の高校3年生の11月に交流証言者としてデビューした。以降，原爆資料館内での講話を中心に，これまで長崎市内小学校，福岡県内小学校，新潟県内高校で講話を実施してきた。秋田大学での講話で5回目であり，オンラインでの講話は今回が初である。

4．講話の構成と内容の分析

（1）講話の構成と概要

前述した通り，講話はZoomによるオンラインで，お二人ともパワーポイントを使用しながらの実施であった。

パワーポイントの内容について，まず佐々木氏は全部で68枚の資料を使用していた。その内訳は，多い順に写真[9] 22枚（32.4％），絵画19枚（27.9％），文字[10] 15枚(22.1％)，地図10枚(14.7％)，手書き地図1枚(1.5％)，グラフ1枚（1.5％）であった。一方の水谷氏は，全部で8枚の資料を使用していた。その内訳は，多い順に写真3枚（37.5％），文字2枚（25.0％），地図1枚（12.5％），写真と絵画の組み合わせ1枚（12.5％）であった。これについては，後にこれまでの講話と合わせて詳述したい。実施した講話のお二人のプロットは，以下の資料3，資料4の通りである。

資料3　佐々木佐久子氏による広島市「被爆体験伝承者」講話（40分53秒，12,071文字）

○　自己紹介，イントロダクション
（51秒（2.1％），351文字（2.9％））
1．祖父の被爆体験
（4分13秒（10.3％），1,268文字（10.5％））
2．1945年8月6日午前6時15分広島で起きたこと
（8分49秒（21.6％），2,360文字（19.6％））
3．竹岡智佐子さんの被爆体験
（19分7秒（46.8％），5,683文字（47.1％））
4．私の夫の話（3分10秒（7.7％），916文字（7.6％））
5．竹岡さんからあなたへ
（1分1秒（2.5％），417文字（3.5％））
6．世界平和と核兵器廃絶のために
（3分42秒（9.1％），1,076文字（8.9％））

・1～6のタイトルは，佐々木佐久子氏講話時使用のパワーポイント及び資料5の内容から筆者作成。

資料4　水谷遥氏による長崎市「交流証言者」講話（25分41秒，7,504文字）

○　自己紹介，イントロダクション
（2分44秒（10.6％），1,025文字（13.7％））
1．池田道明さんの被爆体験
（19分4秒（74.2％），5,130文字（68.4％））
2．池田道明さんがお母さんに聞いた話
（1分5秒（4.2％），512文字（6.8％））
3．池田道明さんの願い
（2分3秒（8.0％），608文字（8.1％））
4．平和の尊さ（45秒（2.9％），229文字（3.1％））

・1～4のタイトルは，水谷遥氏講話時使用のパワーポイント及び資料6の内容から筆者作成。

講話の文字起こし本文は，資料5，資料6の通りである。実際の講話から質疑応答まで，全文掲載してある。

まず，講話の内容構成について，当然ながらお二人とも違いはあるが，佐々木氏の場合は，基本的に以下の3点で構成されていた事が分かる。

・被爆の実相
・被爆体験の「語り」
・平和への願い

また，水谷氏の場合は，上記3点の内「被爆の実相」を除く2点であった事が見て取れる。これまでの講話では，この3点の前段の話として，「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」が語られる事が多かった[11]。しかし，今回の講話では，お二人で相談したわけではないが，こうした「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」といった説明的「語り」は省略されていた。前述の通り，広島市「被爆体験伝承者」の第1期生が養成を修了し，講話を開始した2015（平成27）年から秋田大学での講話を開始し，翌年からは長崎市からも「家族証言者」「交流証言者」もお呼びしている。前者の事例は今回を含めて7件，後者の事例は6件になった。これらの方々の「語り」の内容構成を振り返ると，当然その方によってそれぞれの力点の違いはあるものの，基本的は前述の4つの項目の内容で構成されていた。しかし，今回の講話に至っては，原爆に関するいわば一般的な説明は省かれ，被爆体験の伝承部分が中心となっている講話になったのである。今回の講話の特徴である。

（2）「語り」の時間と文字数に着目した量的分析

①佐々木佐久子氏の講話の分析

次に，文字起こしをした資料5，資料6に基づいて整理した「語り」のプロット（資料3，資料4）に注目し，「語り」の時間と文字数に着目した量的分析から指摘したい。

Akita University

まず，佐々木佐久子氏の講話は文字起こし分の時間で 40 分 53 秒，文字数だと 12,071 文字であった。これまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」講話では前回の清野久美子氏に次ぐ短さであり，また文字数も清野氏に次ぐ少ない結果となった[12]。これは，やはり秋田大学にお呼びして直接「語り」をしていただく講話ではなく，Zoom による講話であった事が第一の理由である。これまでの広島市「被爆体験伝承者」講話は，広島市で実際に実施しているスタンダードな講話を継承し，ほぼ 60 分での講話を実施してきた。しかし，今回は Zoom による講話であるため，学生の負担を考えてこちらから要望して時間を短めにしていただいた。時間や文字数の減少は，こうした影響による。

さて，注目したいのはやはり「語り」の継承部分である。まず，佐々木氏の講話では，自身の祖父，竹岡智佐子氏，自身の夫の 3 名の被爆体験を継承していた。これまで秋田で実施してきた伝承者の方は，基本的はお一人の被爆体験を継承してきた。3 名の方の継承は，他には見られない佐々木氏の特徴である。その理由を，佐々木氏に尋ねたところ，まず何といっても夫の原爆症での死を伝えたいというのが「被爆体験伝承者」を目指した第一のきっかけだったという[13]。さらに，自分の子どもの頃から祖父の被爆体験の話を聞いていたので，祖父の話も加えていった[14]。また，「被爆体験伝承者」育成事業では，登録されている証言者の方の被爆体験を継承しなければならないので，自身の母親と同年代の竹岡智佐子氏の被爆体験を継承したのだという。こうした経緯から，佐々木さんの講話では 3 名の方の被爆体験が語られているのである。

さて，このように佐々木氏の講話では 3 名の方の被爆体験の「語り」，すなわち語られた順に祖父，竹岡智佐子氏，夫の「語り」があった。祖父の被爆体験の部分は「1．祖父の被爆体験（4 分 13 秒（10.3％），1,268 文字（10.5％））」，竹岡智佐子氏の被爆体験の部分は「3．竹岡智佐子さんの被爆体験（19 分 7 秒（46.8％），5,683 文字（47.1％））」と，さらに竹岡氏の“思い”を継承としたと考えれば「5．竹岡さんからあなたへ（1 分 1 秒（2.5％），417 文字（3.5％））」，最後に夫の被爆体験の部分は「4．私の夫の話（3 分 10 秒（7.7％），916 文字（7.6％））」で，全部合わせると時間では 27 分 31 秒（67.3％），文字数では 8,284 文字（68.6％）であった。

資料 7 は，秋田大学にこれまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」の「語り」の継承部分の時間と文字数である。

秋田大学にこれまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」の講話と継承した被爆体験の伝承部分の「語り」を量的に比較すると，佐々木氏の場合は前回の清野久美子氏に次ぐ割合の時間と文字数であった事が分かる。時間も文字数も，ほぼ全体の 2/3 を占めていた。基本的に「被爆体験伝承者」であるので，その「語り」はオリジナルの被爆者である証言者の「語り」を継承した「語り」が中心になるのが本道であろう。しかし，これまで秋田大学にお呼びした「被爆体験伝承者」の方々にも様々な考えを持つ方がおり，その方の考えが自身の講話の内容構成に反映されていた事が解明されてきていた[15]。今回の佐々木氏の場合は，まさに「被爆体験伝承者」としての

資料 7　秋田大学にこれまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」の「語り」の継承部分の時間と文字数

実施年	氏名	全講話時間	全文字数	「語り」の継承部分	時間	割合	文字数	割合
2015	髙岡昌裕	93分46秒	23,758文字	「3　被爆体験伝承講話」「（1）新宅勝文さんの体験」	**30分10秒**	**32.2%**	**8,056文字**	**33.9%**
2016	楢原泰一	62分9秒	16,396文字	「5．被爆体験伝承講話（岡田恵美子さんの被爆体験伝承）」	**12分33秒**	**20.2%**	**3,379文字**	**20.6%**
2017	藤井幸恵	46分51秒	12,444文字	「2．森田さんと 2 年生の被害体験」	**28分38秒**	**61.1%**	**7,381文字**	**59.3%**
2018	山岡美知子	60分5秒	16,608文字	「3．当時20歳の母が見た被爆した広島の様子」	10分8秒	16.9%	2,901文字	17.5%
				「4．被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事」	3分46秒	6.3%	1,016文字	6.1%
				合計	**13分54秒**	**23.1%**	**3,917文字**	**23.6%**
2019	石綿浩一	60分17秒	20,868文字	「3．被爆者、細川浩史さんの体験①」	5分49秒	9.6%	1,869文字	9.0%
				「5．被爆者、細川浩史さんの体験②」	48秒	1.3%	285文字	1.4%
				「7．被爆者、細川浩史さんの体験③」	29秒	0.8%	361文字	1.7%
				「8．妹瑤子さんの日記と被爆」	17分12秒	28.5%	5,830文字	28.0%
				合計	**24分18秒**	**40.3%**	**8,345文字**	**40.0%**
2020	清野久美子	36分54秒	9,775文字	「3．松島圭次郎氏の被爆体験」	13分39秒	37.0%	3,725文字	38.1%
				「4．戦後の松島氏と松島氏の詩」	1分57秒	5.3%	467文字	4.8%
				「5．清野氏の母の被爆前の生活」	3分10秒	8.6%	839文字	8.6%
				「6．清野氏の母の被爆体験」	11分43秒	31.8%	3,010文字	30.8%
				合計	**30分29秒**	**82.6%**	**8,041文字**	**82.3%**
2021	佐々木佐久子	40分53秒	12,071文字	「1．祖父の被爆体験」	4分13秒	10.3%	1,268文字	10.5%
				「3．竹岡智佐子さんの被爆体験」	19分7秒	46.8%	5,683文字	47.1%
				「5．竹岡さんからあなたへ」	1分1秒	2.5%	417文字	3.5%
				「4．私の夫の話」	3分10秒	7.7%	916文字	7.6%
				合計	**27分31秒**	**67.3%**	**8,284文字**	**68.6%**

Akita University

「語り」の内容構成であった事が分かる。

②水谷遥氏の講話の分析

一方，水谷氏の講話は文字起こし分の時間で 25 分 41 秒，文字数だと 7,504 文字であり，これまでの長崎市の方の講話で最も短い講話となった。資料 8 は，秋田大学にこれまでお呼びした長崎市「家族証言者・交流証言者」の「語り」の継承部分の時間と文字数である。例えば，同じ Zoom での開催であった前回の中島麗奈氏の場合は，時間で丁度 27 分，文字数で 8,482 文字，2019（令和 1）年の田平由布子氏の講話は，33 分 8 秒，6,819 文字，また中島氏と同年齢であった 2017（平成 29）年の松野世菜正の講話は，36 分 45 秒，8,969 文字であった。今回の水谷氏の場合は，時間は一番短いが，文字数からは他の方とほぼ同じくらいの内容であった事が分かる。

次に，被爆体験の継承部分である。水谷氏の場合は「4．平和の尊さ（45 秒（2.9％），229 文字（3.1％））」を除く全ての部分，すなわち「1．池田道明さんの被爆体験（19 分 4 秒（74.2％），5,130 文字（68.4％））」と「2．池田道明さんがお母さんに聞いた話（1 分 5 秒（4.2％），512 文字（6.8％））」と「3．池田道明さんの願い（2 分 3 秒（8.0％），608 文字（8.1％））」の部分で，合わせると時間では 22 分 12 秒（86.4％），文字数では 6,250 文字（83.3％）となり，時間，文字数とも全体の 8 割を超える分量となっていた。

秋田大学にこれまでお呼びした長崎市「家族証言者」や「交流証言者」講話での継承した被爆体験の「語り」を量的に比較すると，水谷氏の場合は前回の清野久美子氏や 2018（平成 30）年の平田周氏に次ぐ割合の時間と文字数であった事が分かる。時間も文字数も，ほぼ全体の 8 割を超える分量を占めていた。これは，被爆の現状を事実的「語り」[16] や現象的「語り」[17] といった説明的語りにより詳細に解説する構成ではなく，個人の被爆体験を重視した構成になっていたという事である。またそればかりではなく，これまでの講話では，広島の講話が先で長崎の講話が後に実施している。後で話される長崎の方は，先に広島の方の講話で原爆に関する基礎的な説明をするので，その部分を省略して話される場合が多い[18]。広島と長崎の比較をすると，長崎の方の講話での伝承部分の「語り」が多くを占めるのは，こうした事情によろう。

3．参加者の感想

参加者は，秋田大学教育文化学部の社会科教育の免許取得科目を受講している学生 24 名，教員 2 名，広島平和記念資料館啓発課の房尾和枝氏，長崎平和推進協会継承課の入浜由佳子氏，ABS 秋田放送の太田朋孝氏の合計 29 名であった。

聴講したアンケートとして 2 点，「○実際にそれぞれの『語り』を聞いた感想・意見等をお聞かせください。1. 広島市『被爆体験伝承者』講話，2. 長崎市『交流証言者』

資料 8　秋田大学にこれまでお呼びした長崎市「家族証言者・交流証言者」の「語り」の継承部分の時間と文字数

実施年	氏名	全講話時間	全文字数	「語り」の継承部分	時間	割合	文字数	割合
2016	佐藤直子(家)	49分56秒	11,300文字	「3．父池田早苗氏の紹介」	4分00秒	8.0%	903文字	8.0%
				「4．紙芝居『原爆でみんな死んでいった　池田早苗さんの証言から』」	13分20秒	33.4%	2,572文字	22.8%
				「5．紙芝居の補足」	3分50秒	7.7%	1,010文字	8.9%
				「6．戦後の暮らし」	11分48秒	23.6%	3,185文字	28.2%
				合計	**32分58秒**	**66.6%**	**7,670文字**	**67.9%**
2017	松野世菜(交)	36分45秒	8,969文字	「3．山脇佳朗さんの被爆体験」	**17分20秒**	**47.2%**	**5,081文字**	**56.7%**
2018	平田周(家)	46分40秒	9,969文字	「1．祖父松尾敦之の肉声」	1分25秒	3.0%	337文字	3.4%
				「3．祖父松尾敦之の紹介」	2分05秒	4.5%	469文字	4.7%
				「4．松尾敦之の日記による被爆体験」	33分00秒	70.7%	6,850文字	68.7%
				「5．母の戦後と私」	5分20秒	11.4%	1,117文字	11.2%
				合計	**40分40秒**	**87.3%**	**8,773文字**	**88.0%**
2019	田平由布子(交)	33分8秒	6,819文字	「2．被爆者である吉田勲さんの紹介」	1分36秒	4.8%	575文字	8.4%
				「4．吉田勲さんの被爆体験」	3分29秒	10.5%	969文字	14.2%
				「5．戦後の吉田勲氏の暮らしと核廃絶活動」	7分59秒	24.1%	1,625文字	23.8%
				合計	**13分4秒**	**39.4%**	**3,169文字**	**46.5%**
2020	中島麗奈(交)	27分	8,482文字	「2．信子さんの紹介と被爆前の暮らし」	3分13秒	11.9%	1,132文字	13.3%
				「3．信子さん自身の被爆体験の「語り」(信子さん自身の動画)」	5分44秒	21.2%	1,289文字	15.2%
				「4．信子さんの被爆体験（中島氏による）」	10分3秒	37.2%	3,473文字	40.9%
				「5．終戦後の信子さん（中島氏による）」	2分11秒	8.1%	789文字	9.3%
				「6．終戦後の信子さん（信子さん自身の動画）」	2分52秒	10.6%	795文字	9.4%
				合計	**24分3秒**	**89.1%**	**7,478文字**	**88.2%**
2021	水谷遥(交)	25分41秒	7,504文字	「1．池田道明さんの被爆体験」	19分4秒	74.2%	5,130文字	68.4%
				「2．池田道明さんがお母さんに聞いた話」	1分5秒	4.2%	512文字	6.8%
				「3．池田道明さんの願い」	2分3秒	8.0%	608文字	8.1%
				合計	**22分12秒**	**86.4%**	**6,250文字**	**83.3%**

・「家」は家族証言者、「交」は交流証言者である。

Akita University

講話」を記入してもらった(資料 9 参照)。回収数は,「1. 広島市『被爆体験伝承者』講話」「2. 長崎市『交流証言者』講話」ともに 23 件であった。こうしたアンケート結果について，記述の内容から質的分析を試みたい。

（1）広島市「被爆体験伝承者」佐々木佐久子氏の講話への感想・意見

まず，広島市「被爆体験伝承者」の佐々木佐久子氏の講話への感想・意見について，多かった順に 3 点取り上げたい。

まず最も多かった感想は，佐々木氏の「語り」が具体的で当時の状況が鮮明に伝わったとの感想で，23 件中 14 件[19]（60.9%）であった。例えば，(1-1)「実際に，おじいさんや竹岡さん，旦那さんの話から具体的なお話があったので，ゆったり落ち着いた口調の中から切実な気持ちを感じることができました。－中略（筆者）－また，具体的に数字や被害や，写真などの悲惨なものを見せるより，○○ちゃん，など私たちにも身近な言葉で優しく語りかけられるように言われた方が心にきました」，(1-2)「竹岡さんと旦那さんの話を聞いて，原爆が落ちた音の再現や話し方から，切実感が感じられ，体験談を実際に聞くことの意義を感じました。」，(1-19)「細かい描写によってまるで自分もそこにいるかのように感じられ，生々しい戦争の残酷さを想像することができた」等の感想である。これまでの講話においても，原爆投下後の状況が具体的で鮮明に伝わってきたとの感想は最も多い感想になる事が多く，前回の清野久美子氏の講話でもそうであった。講話者は，これまでもパワーポイントにより写真や絵等の視覚資料を効果的に活用する場合が多いが，今回の佐々木氏の講話においてもそうであった。佐々木氏の講話では,前述した通り全部で 68 枚のパワーポイントを活用していた。その内訳は，多い順に写真 22 枚 (32.4%), 絵画 19 枚 (27.9%), 文字 15 枚 (22.1%), 地図 10 枚（14.7%），手書き地図 1 枚（1.5%），グラフ 1 枚（1.5%）であった。こうした視聴覚資料の効果的活用はもはや定着しており，今回もそうであったといえる。また，とりわけ絵画については，被爆者自身が描いたものではないが，被爆体験の内容に合わせて，膨大な資料から佐々木氏自身が選んだものであるという[20]。こうした被爆絵画の活用は，被爆体験の伝承を厳密に考えた場合は，体験者自身が描いたものが選ばれる事が望ましいのかもしれないが，状況が状況だけに必ずしもその場面が被爆者自身によって描かれるとは限らない。伝承者による講話では，今回の講話に見るように“集団的記憶”としての被爆のシーンが選択されている事が分かる。

さらに，指摘しておきたいのは地図の効果的活用である。佐々木氏の講話では,被爆者の具体的体験を語る時，その体験場面が爆心地のどこでの体験なのかを確認するように定期的に地図を活用していた。これは，前回の清野久美子氏の講話でも見られた手法である。社会科教育では，小学校 3・4 年生における地域学習で市町村や県の様子を捉える時，実際に自分でその場を歩く体験的理解と地図を用いての俯瞰的理解の両方の手法が活用される場合が多く，前者を「ムシの目」，後者を「トリの目」と呼ぶ時がある。この話を佐々木氏自身にしてみたところ，まさにその通りの効果を狙ったものであるという[21]。実際の体験者の目線と，俯瞰的目線を組み合わせて，被爆の実情を「わかりやすく」するために意図的に地図を活用していた点は注目しておきたい。

次に多かったのは，“平和”について考えさせられたとの感想で,23 件中 11 件[22]（47.8%）であった。例えば，(1-5)「海外との違いについて，地域によって平和の認識の違いがあり，そもそも平和が何かを考えたこともない地域もあることに驚いた。国際平和は自国だけでは成り立たないため，こうした視点も必要だと思った」，(1-10)「佐々木さんのお話の中で，それぞれの国や日本の中でも地方によって平和の感覚が違うということ,また,『平和は学ぶものなんだ』と考える人もいるというお話が印象的であった。平和とは何なのかということや，平和に対する価値観が違う中で，被爆体験の伝承を聴いて聞き手にどのようなことを考えてほしいか，どう聴いてほしいかということを意識した語りが重要だと思ったし，被爆体験の伝承は，語り手だけではなく，聞き手も大きな役割をもっていると思った」，(1-14)「今回の講話を聞いて，平和の捉え方はそれぞれの国で異なるということが印象に残りました。日本では，平和主義が憲法の基本原理とされたり，教育において平和教育が行われたりと，平和について触れたり考えたりする機会が多いと思います。しかし，他国では平和について考える余裕がなかったり，同じ平和という概念でも，各国で捉え方や考え方が異なったりするということでした。そうなると，平和についての捉え方や考えの違いが摩擦を引き起こし，対立を生む要因となってしまう可能性もあると思います。そのため，私達を含め各国が平和について話し合い，世界が目指す平和像というものを共有していく必要があると思います。しかし，世界が共通して目指す平和像というのは，すぐに見つかるものではありません。粘り強く平和について議論する必要があります。その議論や対話の積み重ねが，平和への道標となるのではないかと思います」等の感想である。こうした“平和とは何か？”の問い掛けは，実はこれまでの講話で松野世菜氏（2017 年講話，講話時 19 歳）や田平由布子氏（2019 年講話，講話時 26 歳）等，長崎市「交流証言者」の聴講者である学生に近い年齢の若い講話者によって度々投げ

Akita University

かけられてきた課題であった。また，そうした聴講者への問いかけではないが，前述した様に伝承者の講話の構成は，ほぼ「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」「被爆の実相」「被爆体験の『語り』」「平和への願い」の4部構成になっており，これからの“平和”に関しては必ず講話の最後の部分で触れられる話題である。極めて抽象度が高い題目であるが本質的問いである。佐々木氏の場合は，国によって“平和”の考え方が違っている場合どうしたらよいのかの問い掛けが，学生達に印象に残ったようである。

次に多かったのは，今後教師になるにあたって自分事として考えたいとの感想で，23件中10件[23]（43.5％）であった。例えば，(1-6)「自分は教師になろうとしており，これからは今回お話ししてくださった佐々木さんのように，平和の大切さを伝えていく立場になる。そうした際には，自分の声で，戦争の悲惨さや，平和な生活を築くことに努力する大切を伝えていきたいと思った」，(1-8)「自分は教師を目指しているので学校教育でこのような歴史をこどもたちに伝えていきたい。戦後80年が経った現在，実際に戦争体験をした人達はかなり減ってきている。これからは，戦争について話を聞くだけでなく，伝えていく主体としてもなっていかなければならない。そのために，これからも学習を進めていきたい」，(1-23)「『伝えたい』という気持ちが大切であることを学び，将来教師となった時に戦争を経験していない子どもたちに対して，自分なりの言葉で伝えられるようにしていきたい」等の感想である。聴講者は，基本的には社会科の教員を目指している学生達なので，毎年多くみられる感想である。教師になるや学校教育での文脈ではなく，継承していくといった文脈での感想も23件中7件[24]（30.4％）と次の4番目の多さであり，教師や学校教育での文脈と合わせると23件中17件（73.9％）と実は最も多い感想になる。聴講者である学生達は，メディア報道等では“直接戦争体験を聞ける最後の世代”などと言われる事があるが，そうしたことを自覚しているのか自分達自身が継承の主体となって取り組まなければならないとの感想が最も多くなっている事が分かる。

（2）長崎市「交流証言者」水谷遥氏の講話への感想・意見

次に，長崎市「交流証言者」水谷遥氏の講話への感想・意見について取り上げたい。前述の通り，水谷氏は講話時20歳であり，2017（平成29）年にお呼びした「交流証言者」である松野世菜氏（講話時19歳），そして昨年2020（令和2）年に同じZoomで実施した中島麗奈氏（講話時19歳）とほぼ同年齢時での講話であった。聴講者である学生達と同世代の講話者の「語り」を，学生達はどう受け止めたのであろうか，多かった順に3点取り上げたい。

まず最も多かった感想は，やはり若い世代にもかかわらずこうした継承事業に関わる水谷氏への尊敬と感銘に関する感想で，23件中16件[25]（69.6％）であった。例えば，(2-7)「今回の講話は同世代の方だったのだが，非常に上手な語りで，更に堂々とされていたので教育者を目指す身として見習いたい部分がたくさんあった。個人的に一番驚いたことが，私たちの世代の人が，『伝承者』として活躍していることである。全くと言っていいほど戦争と縁のない生活を過ごし，戦争に対するイメージは今まで学校や講話で聴いてきた戦争体験からしか得ていないのにも関わらず，まるで自分が体験したかのような語りができていて素晴らしいと思った。」，(2-12)「交流証言者の水谷さんは私たちとほぼ同年代の方ということもあり，どうして交流証言者になったのか，どのような語りをされるのかなど，様々なことに興味を持ちながら講話を聴きました。お話を聞く中で，若くして交流証言者となり，戦争の悲惨さや平和の尊さを多くの人に伝えている水谷さんの熱意が伝わってきました」，(2-21)「ボランティアでの証言者活動を，私たちと同世代の方がやっていることを知り，一番は驚きがありました。水谷さんは，偶然が重なって今に至っていると言っていましたが，偶然であったとしても現在その活動を使命感を強く持ってやっていらっしゃること自体が，誰にでもできるわけではないと思うので，とても尊敬の念を抱きました」等の感想である。以前の松野氏や中嶋氏の講話での感想においても，同じく最も多くを占めた感想であった。聴講者である学生達は，同世代の主体的で熱心な取り組みに大いに刺激を受けたのである。

次に多かったのは，水谷氏自身が普段小学生に講話する機会が多く，そうした小学生への講話での工夫に関する感想で，23件中12件[26]（52.2％）であった。例えば，(2-3)「主に小学生向けの講話と言うことで，今回は省略されていましたが，質問や会話を多く取り入れることはとても有効的だと思います。子ども達と一体となって講話を進めることで，水谷さんの人柄とマッチしてより充実した講話が行われているのだろうと想像できました」，(2-15)「水谷さんは小学生向けの講話が多いということで，語りかけるような話し方でした。特に，池田さんの体験を『私』として話すことで小学生は自分に近い存在として捉えることができるのではないかと思いました。」，(2-20)「普段は小学生向けの講話を行っているということで，小学生に対しての授業づくりに参考になるようなことも聞くことができてよかったです」等の感想である。前述した様に，水谷氏は小学生に対して講話をする機会が多く，学生達も教員養成系の学部に所属する学生であ

Akita University

るので，講話の最後に聴講した学生に対して「被爆経験のないあなたが小・中学生に交流証言（原爆についてや平和に関する授業）をする機会があるとします。児童が“自分自身”と関連して考えるようになるためにあなたならどんな工夫をしますか」との問いかけをしていた。小学生への講話での工夫に関する感想が多いのは，この影響であろう。また，聴講した学生には小学校教員を目指すものも多く，自分の実習を想定して聴講していた学生もいた事にもよろう。

最後に，3 番目に多かったのは，伝える，継承することの大切さに関する感想で，23 件中 7 件[27]（30.4％）であった。例えば，（2-4）「やはり人に直接聞いたり，自身で体験したりする大切さを改めて感じました。今後は，自分が経験したり，発信する側に立ってみたりすると共に，自分事と捉える方法についても考えていきたいと思います」，（2-19）「戦争がない，所謂平和である現在の日本に住む私たちは，これで幸せなのだろうか。平和であっても現在のわたしたちにも様々な問題や悩みがあり，『今の自分が幸せかどうか』と考えることはないかもしれない。しかし，戦争を実際に体験し，加害者・被害者となった人たちが心から願った『平和』を私たちは実現しなければならないと考えた。そのために継承が必要であることを学ぶことができた」，（2-23）「当事者の方が言っていた『今の日本の平和は血と涙の上にできている』という言葉がとても印象的で，平和であることを当たり前に感じて生活するのではなく，長い時間をかけてつくられた平和の中に生きているということを普段の生活で意識することが大切だと思った。唯一の被爆国に住む私たちだからこそ，発信できるものであったり伝えられるものがあるのではないかと感じたので，戦争や原爆など当時の状況を知ることから始めていきたい。」等の感想である。また，前述の佐々木氏の講話と同じ様にこれから教師となって学校教育の場で実践していくといった文脈の感想も 23 件中 6 件[28]（26.1％）あり，合計すると 13 件（56.5％）で，2 番目に多い感想となる。こうした伝承者講話を聴講して，それぞれの学生が戦争体験の継承の意義を考える機会を持つ事は，やはり大切な機会である事を痛感する。

4．小括

以上，今回で 7 回目となる広島市「被爆体験伝承者」である佐々木佐久子氏，長崎市「交流証言者」である水谷遥氏の講話について，時間と文字数による量的分析と，聴講者による感想の質的分析を試みた。最後に，小括として 2 点，Zoom によるオンラインでの講話ついてと視聴覚資料の活用について述べていきたい。

まず 1 点目は，Zoom によるオンラインでの講話ついてである。今回も，前回に引き続き新型コロナウィルスの影響で，Zoom によるオンラインでの講話になった。これまでの学生達の感想では，伝承者の「語り」は，やはり実際に対面しての生の「語り」に説得力があり，その意義を認める感想が多かった。しかし，意外にも前回初めて実施した Zoom での講話では，比較的肯定的な意見が多かった[29]。今回のアンケートでは，これまでのアンケートと同様に，前述のシンプルな意見の問いかけで，特段 Zoom 開催での感想を求めてはいなかったが，全感想の内，佐々木氏への感想での 2 件[30] が Zoom での講話に対する感想を述べていた。

その内容に関しては，今回は肯定的な意見と否定的な意見に分かれた結果となった。肯定的な意見としては，（1-4）「最後の質問にもありましたが，正直私も今回はリモートであり，会話ではなく語りであるため，資料映像と大差ないのではと思っていました。しかし実際に講話を聞いてみると，佐々木さんが体験者の意向を忠実に再現しようとし，かつ佐々木さん自身が思いを重ねて私達に講話してくださったことを感じることができ，再度考え直すきっかけにすることができました」の感想である。一方，否定的な意見としては，（1-15）「昨年と同様，zoom での開催となり，竹岡さんがこだわっていた『ピカドン』の話し方はきっと実際に会って聞いたほうが印象に残ったのではないかと感じました。質疑でも『生の声』という話はありましたが，どこまでが生の声といえるのか考えてみたいです」の感想である。

肯定的な意見では，佐々木氏の「体験者の意向を忠実に再現しよう」とする「語り」の丁寧さと「佐々木さん自身が思いを重ねて私達に講話してくださったことを感じる」といった感性的「語り」[31] の効果的活用の 2 点が見て取れる。

一方，否定的意見では「竹岡さんがこだわっていた『ピカドン』の話し方はきっと実際に会って聞いたほうが印象に残ったのではないかと感じました」と言う様に，原爆投下の瞬間を伝える臨場性がリモートでは限界があったと指摘する点が見て取れる。

いずれにしても，新型コロナウィルスの今後の状況にもよるが，その利便性からリモートでの講話は今後も続くであろう。機器の環境が整えば，参加が容易となるリモートの講話であるが，「語り」の継承の本質を鑑みれば，実際の「語り」を直に聴講するスタイルとはやはり相違するものであろう。

さらに，こうしたリモートでの「語り」は，「語り手」の「語り」の在り方に今後どのような影響があるのかも興味深い。例えば，ひめゆり平和祈念館での仲田晃子氏が自身の説明員としての「語り」を構築する際に，証言員の「語り」自体が聞き手によって再構成される事に気

Akita University

付き，自身の「語り」に活かしていった事を説明していただいた事があった[32]。すなわち，「語り部」自身も，常に固定化した「語り」を展開しているのではなく，常に再構成しながら「語り」を構築しているという事である[33]。直接対面した生の「語り」ではなく，リモートでの「語り」は，こうした講話者の「語り」の構築にどう影響するのかも，今後の注目点であろう。

次は，視聴覚資料の活用についてである。2015（平成27）年に初めて広島市「被爆体験伝承者」である髙岡昌裕氏（講話時36歳）での講話では，養成事業の主体である広島市市民局国際平和推進部平和推進課から「語り」を中心にとの指導もあり，講話時に使用したパワーポイント資料はわずか4枚であった[34]。しかし，その後の伝承者の講話ではかなり多くのパワーポイント資料が使用され，最も多い時では2018（平成30）年実施の山岡美知子氏で，全てではないが162枚の資料が使用されていた。もはや伝承者の講話では，こうした視聴覚資料は欠く事のできないアイテムであり，その効果的活用が講話に臨場感を生み，実際の被爆体験者の「語り」に迫る効果となっていた。

しかし，今回の水谷氏の講話では，こうしたパワーポイント資料はわずか8枚であった[35]。その理由を水谷氏自身に伺ったところ[36]，オリジナルの被爆者である池田道明氏自身の講話のスタイルを踏襲しているからとの事であった。池田氏の講話では，パワーポイントは使用せず，使用するのは写真が2枚，地図が1枚のみであるという。したがって，水谷氏自身は8枚でも使い過ぎの感があるという。加えて，継承した池田氏の被爆体験を語る時，実際にその光景に見合う写真がなく，むしろ無理をして類似した写真を用意しても結局使い辛いのだという。例えば広島の場合，佐々木氏の様に実際の被爆者がその光景を写真や絵画で提示しなくても，かなり多くの視聴覚資料があり，その中から選出して自身の「語り」を効果あるものとしていた。しかし，長崎の場合はまずそうした視聴覚資料に乏しい現状があるのだという。さらには，広島の様にかなり実際の光景に近い視聴覚資料を用意できるなら，「語り」をより効果あるものにすることが可能であるが，それが無いのであれば，むしろ「語り」を聴講した聞き手によるイメージ化，その光景の想像自体を阻害するものとなってしまう。オリジナルの被爆者ではなく，それを継承した伝承者が語るのであれば，尚の事そうであろう。これまで長崎市の場合は，「家族証言者」としてはお二人，2016（平成28）年の佐藤直子氏（講話時52歳）と2018（平成30）年の平田周氏（講話時59歳）を秋田にお呼びしている。2016（平成28）年に初めてお呼びした佐藤直子氏は，そのオリジナルの被爆者である実父の池田早苗氏が自身の講話の時に使用していた紙芝居を活用し[37]，2018（平成30）年にお呼びした平田周氏は，そのオリジナルの被爆者である祖父の被爆俳句と漫画を活用した朗読劇のような「語り」であった[38]。広島の伝承者達はパワーポイントを活用したいわばスタンダードな「語り」に対して，長崎市の場合は独特の手法を用いた「語り」であり，それが広島に対する長崎の特徴を示してきた。一方，「交流証言者」としては，これまで2017（平成29）年の松野世菜氏（講話時19歳），2019（令和1）年の田平由布子氏（講話時26歳），2020（令和2）年の中島麗奈氏（講話時19歳），そして今回の水谷氏をお呼びしてきた。これまでの「交流証言者」

資料10　広島市「被爆体験伝承者」のパワーポイントの内訳

実施年度	氏名	写真	絵画	モデル図	マンガ	ポスター	写真+絵画	地図	手書き地図	写真+地図	新聞	グラフ	年表	家系図	文字	合計
2015(平成27)	髙岡昌裕(36)	2(50.0%)	2(50.0%)													4
2016(平成28)	楢原泰一(40)	29(58.0%)	7(14.0%)												14(28.0%)	50
2017(平成29)	藤井幸恵(73)	18(29.5%)	18(29.5%)					8(13.1%)		1(16.3%)					16(26.2%)	61
2018(平成30)	山岡美知子(67)	87(53.7%)	12(7.4%)	18(11.1%)			3(1.9%)	8(4.9%)		2(1.2%)		3(1.9%)			29(17.9%)	162
2019(令和1)	石綿浩一(55)	17(45.9%)	13(35.1%)				1(2.7%)	1(2.7%)				1(2.7%)			4(10.8%)	37
2020(令和2)	清野久美子(62)	36(51.4%)	21(30.0%)					8(11.4%)	2(2.9%)	2(2.9%)					1(1.4%)	70
2021(令和3)	佐々木佐久子(71)	22(32.4%)	19(27.9%)					10(14.7%)	1(1.5%)			1(1.5%)			15(22.1%)	68

・(　)内は、講話時の年齢
・写真、絵画、地図、グラフ等は、文字での説明文がある場合も含んでいる。

資料11　長崎市「家族証言者・交流証言者」のパワーポイントの内訳

実施年度	氏名	写真	絵画	モデル図	マンガ	ポスター	写真+絵画	地図	手書き地図	写真+地図	新聞	グラフ	年表	家系図	文字	合計
2016(平成28)	佐藤直子(52)家	11(31.4%)	17(48.6%)					1(2.9%)		1(2.9%)				1(2.9%)	4(11.4%)	35
2017(平成29)	松野世菜(19)交	13(46.4%)	1(3.6%)					3(10.7%)				1(3.6%)			9(32.1%)	28
2018(平成30)	平田周(59)家	14(28.6%)			8(16.3%)							1(2.0%)		1(2.0%)	25(51.0%)	49
2019(令和1)	田平由布子(26)交	27(62.8%)				1(2.3%)		6(14.0%)		1(2.3%)	1(2.3%)	1(2.3%)	1(2.3%)		5(11.6%)	43
2020(令和2)	中島麗奈(19)交	9(56.3%)												1(6.3%)	6(37.5%)	16
2021(令和3)	水谷遥(20)交	3(37.5%)					1(12.5%)	1(12.5%)							2(25.0%)	8

・(　)内は、講話時の年齢
・「家」は家族証言者、「交」は交流証言者
・写真、絵画、地図、グラフ等は、文字での説明文がある場合も含んでいる。

Akita University

の「語り」は，広島市「被爆体験伝承者」の講話と同様に，パワーポイントを活用した「語り」の手法をとっており，その枚数も松野氏 28 枚，田平氏 43 枚，中嶋氏 16 枚と広島と比較すると少ないながらも，「語り」の時間と対応すれば十分な資料を用いての「語り」であった。しかし，今回の水谷氏の「語り」は，こうしたパワーポイントを活用した「語り」に一石投じるものである。水谷氏自身は，今後やはりこれまでの「交流証言者」と同様に多くのパワーポイント資料を活用する手法に転ずるかもしれないとは言っているが，果たしてどのような手法を取るのか，今後の展開に注目していきたい[39]。

これに関連して注目したいのは，長崎市の伝承者達の使用するパワーポイント資料での，絵画資料である。以下に示した資料 10 と資料 11 は，これまで秋田大学で講話していただいた伝承者の方々の使用したパワーポイントの内訳である。特に資料 11 に注目していただきたい。長崎市の場合は，絵画資料が 1 点のみ（2017 年度の松野世菜氏）なのである[40]。対照的に，広島市の場合は全体の 1/3 ほどを絵画資料で占めており，写真資料に次ぐ多さである。これは，広島市がこれまで原爆絵画の作成と活用に力を入れてきた影響であろう。長崎市の「語り」の手法が，紙芝居や朗読劇，ご本人の動画等，多様な「語り」の手法をとるのも，こうした視聴覚資料の両者の違いによるものと言える。

1　2009-2011 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：21530972）。その内容は，拙著『2009-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書　地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用』（暁印刷，2015 年）としてまとめている。

2　2012-2014 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」（課題番号：24531174）。その内容は，拙著『2012-2014 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書　戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』（2015 年，暁印刷）としてまとめている。

3　2015-2017 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」（課題番号：15K04475）。その内容は，拙著『20015-2017 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書　継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』（2018 年，八郎潟印刷）としてまとめている。

4　2018-2020 度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：18K02606）。その内容は，拙著『2018-2020 度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　地域における継承的アーカイブと学習材としての活用』(2021 年, 八郎潟印刷）としてまとめている。

5　「次世代の平和教育」については，前掲註 3 の報告書にまとめている。その特色として，以下 3 点を指摘した。
（1）継承的アーカイブの活用
（2）戦後の平和希求活動への着眼
（3）目的的平和教育から方法的平和教育へ

6　「家族証言者」とは，「被爆者の子，孫等の家族，及び被爆者と親戚関係にある者」である。また「交流証言者」とは，「同居や団体活動などにより被爆者との密接な交流経験を有する者」または「被爆者と関わりはないが，体験を継承する意志の強い者」である。長崎市「『語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）』推進事業実施要項」（2014 年）「3　対象者の要件」による。

7　佐々木氏提供（2021 年 6 月 10 日）資料の「プロフィール」による。

8　水谷氏提供（2021 年 7 月 17 日）資料の「プロフィール」と事前の Zoom テスト時における聞き取り（2021 年 7 月 20 日）による。

9　写真，絵画，地図，グラフ等は，文字での説明文がある場合も含んでいる。

10　表紙，タイトルも含む

11　前掲註 3 の報告書の内，「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」（9-120 頁）参照。

12　前回の清野久美子氏の場合は，時間で 36 分 54 秒，文字数で 9,775 文字であった。前掲註 4 の報告書の内，「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」の「3．2020（令和 2）年度の講話」（91-128 頁）参照。

13　佐々木氏への電話での聞き取り(2021 年 7 月 29 日)による。

14　佐々木氏によれば，佐々木氏の子どもの頃には普通に普段の生活の中に原爆の話があったという。佐々木氏や筆者自身も含めて，現在の 50 代 60 代の世代は，直接親が戦争体験を持つ子どもの世代である。この世代では，子どもの頃には学校教育ではなく，市井に普通に戦争の話があり，その痕跡があった。佐々木氏は，そうした状況を受けて，祖父の話を自身の講話に盛り込んでいるのである。

15　例えば，前掲註 4 の報告書の内，「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」の「1．2018（平成 30）年度の講話」の山岡美知子氏の事例（11-50 頁）参照。

16　「事実的『語り』」は，語られるストーリーの主体，場，日時，そしてその時の戦局や状況といった客観的状況に関する説明的な「語り」である。これは，実際の体験者ではなくても可能な「語り」であり，文献等による史実研究により，より精緻な情報にすることが可能である。前掲註 2 の報告書の 83-84 頁参照。

17　「現象的『語り』」は，体験者のおかれた状況下で何が起きたのかを現象として語るものである。例えば，広島の原爆遺跡保存運動懇談会の「原爆遺跡フィールドワーク」における高橋信雄氏の「語り」である。高橋氏は直接的な被爆者ではない。しかし，例えば広島城公園における被爆樹に関する「語り」では，爆心地からの距離，原爆が落ちた時点での温度，その熱線を浴びた時間，爆風の速さ等の客観的情報に基づき，そこで何か起きたのかを現象として語っていた。これもまた，こうした「語り」であれば体験者ではなくても語り得るものである。原爆に関わる客観的史料に基づき，いわば追体験的な「語り」により，臨場感のある「語り」を再現することが可能である。前掲註 2 の報告

Akita University

書の 83-84 頁参照。

18 特に，2018（平成 30）年の平田周氏はそうであった。

19 資料 9 の内，1 の欄の 1，2，3，5，6，7，8，9，11，18，19，20，21，23 の 14 件である。

20 前掲註 13 の聞き取りによる。

21 同上。

22 資料 9 の内，1 の欄の 1，3，5，6，10，11，14，15，17，18，23 の 11 件である。

23 資料 9 の内，1 の欄の 4，5，6，8，9，10，13，15，18，23 の 10 件である。

24 資料 9 の内, 1 の欄の 1, 3, 8, 12, 13, 17, 19 の 7 件である。

25 資料 9 の内，2 の欄の 1，2，3，5，6，7，8，8，9，10，12，13，16，18，21，22，23，の 16 件である。

26 資料 9 の内，2 の欄の 1，2，3，4，6，8，11，15，16，18，20，22 の 12 件である。

27 資料 9 の内, 2 の欄の 3, 4, 8, 12, 14, 19, 23 の 7 件である。

28 資料 9 の内，2 の欄の 1，2，6，10，14，16 の 6 件である。

29 前掲註 4 の報告書参の内,「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」（91-128 頁）参照。

30 資料 9 の内，1 の欄の 4，15 の 2 件である。

31 「感性的『語り』」は，臭いや肌触りといった感触等，まさに体験したものが感じた情報であり，またその時の思いや気持ち，願いといった内面の心情に関する「語り」である。前掲註 2 の報告書の 83-84 頁参照。

32 前掲註 2 の報告書の内,「Ⅳ　沖縄の事例」の「3．ひめゆり平和祈念資料館『次世代プロジェクト』」（61-68 頁）参照。

33 「広島への原爆投下が，人間のすべての過ちとして，普遍化されていく歴史的・社会的背景を追い，戦後の日本の広島がかかえる『核』をめぐる矛盾を問い直」した，日本学術振興会特別研究員（PD）（発刊当時）の根本雅也も，「語り手の自己形成」として「聞き手との相互作用」を指摘している。根本雅也『ヒロシマ・パラドクス　戦後日本の反核と人道意識』（勉誠出版，2018 年），152-163 頁参照。

34 前掲註 3 の報告書の内,「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」の「1．2015（平成 27）年度　広島市『被爆体験伝承者』のデビュー」（11-38 頁）参照。

35 表紙と講話後の学生への質問を除けば，実質 6 枚である。

36 水谷氏への電話での聞き取り（2021 年 7 月 29 日）による。

37 前掲註 3 の報告書の内,「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」の「2．2016（平成 28）年度　広島市『被爆体験伝承者』講話と長崎市『語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）』推進事業」（39-86 頁）参照。

38 前掲註 4 の報告書の内,「Ⅱ　戦争体験の『語り』の継承」の「1．2018（平成 30）年度の講話」（11-50 頁）参照。

39 これまで広島市「被爆体験伝承者」の養成では，3 年間のプログラムが用意されているのに対し，長崎市の「家族証言者・交流証言者」の養成では，それぞれの方の講話の構成を尊重する手法がとられてきており，それがそれぞれの養成事業の特色であった（前掲註 2 の報告書参照）。しかし，水谷氏の話によると一昨年からは審査会（審査員は，被爆者，大学教員等）が設けられ交流証言者に対しても一定の「語り」を担保する手法がとられだしたという。前掲註 36 の聞き取りによる。

40 2016（平成 28）年度の佐藤直子氏の絵画 17 点は，全て紙芝居。

Akita University

資料 5

広島市「被爆体験伝承者」佐々木佐久子氏講和文字起こし（40 分 53 秒，12,071 文字）

〇自己紹介，イントロダクション（51 秒，351 文字）

〇佐々木　はい。あらためまして皆さん，こんにちは。私は被爆体験伝承者の佐々木佐久子と申します。今日はよろしくお願いいたします。今日はお招きいただきまして，ありがとうございます。

被爆体験伝承者っていうのは何かっていうことについて少し説明さしていただきます。戦後もう 76 年たちます。それで，もう原爆を体験した方々もどんどん少なくなっております。貴重な体験，原爆の体験をされた方から体験談をお聞きしたり，その方の貴重な思い，これから平和への思い，そういうものをしっかり受け継いで，次世代へつないでいく役目。それが被爆体験伝承者だと私は思っております。今日は私のおじいさん，そして竹岡智佐子さん，そして私の夫，この 3 人の話を通して，また原爆体験がどういうものかについて皆さんに知っていただきたいなと思っております。

1．祖父の被爆体験（4 分 13 秒，1,268 文字）

最初に私のおじいさん。昭和 20 年当時 64 歳でした。おじいさんはもともと鉄工所を営んでおりました。戦争中は鉄工所で作っていたのは大砲などの兵器でした。たくさん兵器を作ったので，天皇陛下に皇居で表彰してもらったというのがおじいさんの自慢だったそうです。今，考えてみると，ある意味おじいさんは戦争の加害者でもありました。

そんなおじいさんですが，当時は 4 キロ半ぐらいの草津という町に住んでおりました。この土橋というここまで，ここは爆心地から約 800 メートルぐらいの場所なんですけども，そこへ建物疎開に行きました。建物疎開というのは何かって申し上げますと，アメリカは日本が木造家屋が多いのを知っていて，火事が起こる爆弾，焼夷弾っていうのをたくさん落としてました。皆さんの秋田の町もそうでしたように東京大空襲など，町全体が燃えたっていうのもこの焼夷弾という爆弾をたくさん落とした，そのせいなんですね。

焼夷弾は下に落ちてから発火するという，そういう爆弾でした。そのため防火帯を作る，燃え広がらないように防火帯を作る作業，これが建物疎開です。この作業にはおじいさんのような人も行ってましたし，学生もたくさん行っておりました。

8 時 15 分，多分着いてすぐだったのではないかと思います。150 名の町民と一緒に行ったおじさんたちは 800 メートルという近さだったので，全身大やけどをしました。おじいさんは必死で歩いて帰ろうとしました。多分，木の橋はみんな落ちていて，おじいさんは遠回りをして帰ったのではないかと思います。

おじいさんがおうちに着いたときは，8 月 6 日の夕方でした。この写真は顔がきれいに見えますが実はおじさん，顔も腫れ上がって誰だか分からないような形相だったそうです。もちろん着てるものはぼろぼろ，皮膚は垂れ下がり，ここのかかとは骨が見えてたと家族の者が申しておりました。おじいさんが帰っても形相が違うため誰もおじいさんとは気が付かなかったのです。あと広島弁なんですけどね。ワシじゃワシじゃよ。その言葉に，家族もやっとおじいさんだと気が付いて家に入れて手当てをしました。幸いおじいさんは鉄工所を営んでおりましたので，やけどの油薬がたくさんありました。家族がおじいさんを抱えるようにして油薬を全身に塗って介抱しておりました。

実はこの当日，おばあさんはもう広島に食べるものがなかったので，着物をたくさん持って，田舎の親戚へ食べ物を分けてもらうために朝早く出かけておりました。向こうへ着いてから広島に何か大きな爆弾が落ちたらしいよと聞いておばあさんは帰ろうとしましたが，電車も止まっていたため，なかなか帰ることができず，家に着いたのは 8 月 8 日の夕方だったそうです。おじいさんは 8 月 9 日の早朝，おばあさんの腕の中で亡くなりました。建物疎開でやけどをしてから亡くなるまでの 70 時間，おじいさんは何を思い何を考えてたのでしょうか。兵隊に行った 2 人の息子の安否でしょうか。おじいさんは日本のために，日本のためにと，あんなに尽くしていたのに，なぜ亡くならなければいけなかったのでしょう。

2．1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分広島で起きたこと（8 分 49 秒，2,360 文字）

ここから 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分広島で起きたことについてお話しさせていただきます。

広島は七つの川に恵まれ，山もあり，海も近くにありとても風光明媚な場所です。ここの宇品という港は，水深も深く，大きな船が入る町でした。実は明治 27 年，日清戦争のときには大本営といって，ここの爆心地のすぐ近くに軍の統帥

Akita University

機関が備え付けられておって，ここも大本営と言ってありました。今でも大本営跡といった記念碑があります。

そして，被服支廠，糧秣支廠，兵器支廠，それぞれ兵隊さんのための着るもの，食べるもの，兵器を入れる倉庫や，もちろん町の中にはそれらを作るものもたくさんあり，広島は軍都と呼ばれておりました。全国から今はJR，昔は国鉄と言っておりましたが，国鉄に乗って広島駅に着き，広島駅から宇品線で宇品に出て，そこから南の島へ行くルートが作られていたんですね。

これが現在の広島の平和公園です。よく観光に来られた方が公園に原爆が落ちて良かったね，被害が少なかったねとおっしゃいます。でも実はここには大きな町がありました。ここには映画館が二つも三つもあり，今で言うレストランもたくさんありました。いろんな町からここに遊びに来る，そういう町でもあり，この町にはたくさんの人が住んでおりました。

これが現在言われる原爆ドームの最初の姿です。大正７年にチェコのヤン・レッツェルによって設計されとても立派な建物だったそうです。現在95歳の母が言うには，ここはみんなおしゃれして，絵画を見に行ったり，お芝居を見に行ったり，そういう場所だったのよと教えてくれました。これが現在の原爆ドームといわれる建物です。世界文化遺産として登録されております。コロナの前には，毎年1,000万人近くの方が広島に見学に来られておりました。また，外国からも特にオバマ大統領が来られてからは160万人ぐらいの外国人の方も見学に来られておりました。

８月６日の朝，快晴でした。昨夜からの空襲警報で，市民は眠れない夜を過ごしておりました。朝７時半ごろ，１機のB29がやってきました。長崎，小倉，広島と，上空の気候，気象を観測するための飛行機でした。広島の上空に差し掛かったとき，広島の中心部のＴの字の橋があるんですが，それが高度１万メートルからはっきり見えたそうです。その瞬間，広島の運命は決まりました。広島が晴れてるという情報を聞いて，３機のB29が広島の方面に向かって航路を変更しました。

１機目にはこの原子爆弾を積んでいました。重さ４トン，長さ３メートル，直径75センチ，ウラン235を搭載しておりました。２機目は記録用，３機目は科学探測用。この３機が広島上空にやってきて，高度9,600メートルからこの原子爆弾を落とし，上空600メートルで炸裂しました。直径400メートルの大きな火の玉ができました。それを見た被爆者の方が，太陽が落ちてきたみたいだったよと教えてくれました。火球の中の温度は数百万度，地表の温度は3,000度から4,000度，一瞬で家は燃え尽き，人々は真下の人は，白骨と化したといわれてます。

きのこ雲の下には赤ちゃんも女性も，お年寄りも外国人もいたといわれております。これが広島市の当時の地図ですが，この２キロ範囲以内が，大体全焼，全壊したところ，ここの４キロが，大体半壊，半焼したとこといわれておりますが，多くの家は，住める状態ではなかったそうです。

原子爆弾の脅威に熱線，爆風，放射線があります。熱線はこの原子爆弾独特なんですけど，やけどの痕がケロイドといって盛り上がってくるんですね。私の子どものころ，夏でも長袖を着，帽子を目深にかぶって，ケロイドを隠してる，そういう人の姿をたくさん見ました。ケロイドは削っても削っても，手術で削っても削っても，また盛り上がってきてたそうです。

次に爆風です。爆心地から500メートルで，１平米当たり11トン，11トンというと，象が１頭２トンから３トンといわれてるので，１平方メートル当たり３頭の象が乗ったぐらいのその圧力は，あったそうです。それで家が吹き飛ばされたりしたんですね。でも，それだけの爆風があると，今度は真ん中が真空状態になって，吹き戻しがあるんです。それで家が，外に行き，中に行って，崩れたと言われてます。

何といっても恐ろしいのが放射線です。初期障害，急性障害，後障害などがございます。原子爆弾が落ちても，やけどもしてない，けがもしてない人が，次々と血を吹きながら亡くなっていった，それが初期障害です。しばらくして髪が抜けたり，紫の斑点が出て，やはり血を吐きながら死んでいった，そういう障害も急性障害と言います。

何といっても許せないのは後障害です。いまだに，原爆症であるがんと闘っていらっしゃる方が，広島の原爆病院など，そういう病院にたくさんおられます。これはアメリカ軍が撮った写真です。７月25日，８月11日と書いてあるのがお分かりのとおり，７月25日の写真には家がたくさん写っております。こちらは何もありません。これからも分かるように，この原子爆弾，実験だったんですね。これを落としたら，どのような破壊力があるかというのを見たかったんだと思います。ここの中心にお城があるんですけども，ある被爆者の方が一瞬でここの周りのお堀に，お城が崩れていった，そうおっしゃってました。

これが平和公園にある原爆死没者慰霊碑です。この公園自体は建築家の丹下健三さんが設計され，この慰霊碑もそうです。この石碑には，安らかに眠ってください，過ちは繰り返しませぬからと書かれております。この石碑の中には小さな部屋があり，原爆死没者名簿が収められています。実は原爆が落ちた昭和20年の12月までに亡くなられた

Akita University

方が約 14 万人。現在，ここに入ってる名簿，約 31 万人余りの方です。毎年 5,000 名余りの方が，お名前が加えられております。

３．竹岡智佐子さんの被爆体験（19 分 7 秒，5,683 文字）

では，ここから竹岡智佐子さんの被爆体験談をお話しいたします。

竹岡さんの小さいころからの夢は女医さんになることでした。女性のお医者さんですね。お父さんがお医者さんだったんです。でも，女学校の１年生のときは勉強することができましたが，２年生からは毎日，作業に出されました。17 歳になった昭和 20 年，もう学校は卒業していたのですが，女子挺身隊といって仕事に出されていました。

竹岡さんが働いていた場所は，ここの缶詰工場です。竹岡さんの住まいは，ここの己斐というところです。この缶詰工場で作っていたのは人間魚雷でした。竹岡さんは，それが，どういう兵器だか知っていました。若い男の子たちが，この魚雷に乗って敵の戦艦に人間もろともぶつかっていく恐ろしい兵器だと知っていました。でも怖いとか嫌だとか言うと上官に怒られるばかりでなく，牢屋に入れられてしまうので，竹岡さんは毎日黙々と作業をしておりました。

８月５日，いつものように仕事に行きました。お昼過ぎて，みんな今日は徹夜だよ。早く作って送らないと間に合わないからねと言われました。夕方になって，いつも持っている大豆をいったものを食べてお水を飲んで，おなかでふやかして，それが夕食だったんですね。さあ，それでも頑張るぞ，そう思っていました。一生懸命，仕事をしてましたが，夜中近くになって，女の子たち帰っていいよ。あしたはお休みしてくださいと言われました。変だな，さっきまで徹夜と言われてたのに。実は，このとき日本には，もう鉄がなかったんです。お寺の鐘や家のお鍋，お玉まで供出したのに，もうそれも底をついてしまっていたようです。

夜中の空は雲一つなく，紺色で，きれいな星がまたたいていたそうです。竹岡さんは，ほかちゃん，ちいちゃん，わこちゃんの仲良し３人組でした。３人で外へ出て，あしたも暑くなりそうだね，海水浴に行きたいねと話しました。でも海水浴行ってると，グラマン機が来て打ち殺されてはいけないので，３人で宮島に日本が勝つようにお参りに行きましょう。そう約束をしました。ここの己斐駅という電車の駅で８時 15 分に集合と約束しました。竹岡さんは家に帰ってお洗濯をして，お掃除をして，ふと時計を見ると８時 10 分だったんです。あと５分しかない。竹岡さんは小さな鏡を出して，今日は三つ編みがきれいかなと思って見て，もう一度，見たとき，ぴかっ，どーん。

30 メートルも飛ばされ芋畑にいました。目がくらんで何も見えない。それっきり分からなくなりました。しばらくして気が付きました。空を見ると，今まで見たこともないような雲が北へ北へと進んでいました。家を見ると斜めになって，屋根も窓も吹き飛ばされていました。焼夷弾でも落とされたんだろうか。這うようにして家に戻ってみましたが焼夷弾はありませんでした。家の中はぐちゃぐちゃでした。外に出てみると，近所のおばちゃんたちが，大きなガラスが背中に刺さった人，30 センチもある錆びた釘が脇腹に刺さった人，家の中にいた人は，みんな大けがをしていました。

当時の女学生たちは三角巾といって包帯のようなものを持っていたので，竹岡さんはそれでおばちゃんたちの手当てをしてあげました。外に出てみると，下のほうから山に向かって黒い塊がゾロゾロ，ゾロゾロ上がってくるのが見えました。途中でぱたん，ぱたん倒れていきます。近づいてきて分かりました。市内でやけどを負った人たちが，己斐の山を目がけて上がってきたのです。やけどでずるずる，指の先から皮がぶら下がってる。そんな人たちが助けて，熱いよ，水ちょうだい，お姉ちゃん。何人も何人も目の前で倒れていきます。竹岡さんはお水を飲ましてあげたりしていました。

しばらくすると黒い雨が降ってきました。やけどをした人たちは喉が渇いていたので，美味しい美味しいといってこの雨を飲みました。実はこの雨は放射線が含まれている怖い雨だということは後で分かったことです。そんな中，１人の女の子がちいちゃんと呼びました。頬は裂け，頭から血が出。実はその子はほこちゃんだったのです。３人組のほこちゃんなのです。ほこちゃん助かって良かったね。竹岡さんは家の中に入れて看病をしてあげました。実は３人組のもう一人，わこちゃんはいまだに行方不明だそうです。竹岡さんは一体何があったんだろうと近くの丘の上から市内を見渡すと，昨日まであった家がすべて無くなっておりました。ふとお母さんが勤めている陸軍病院の辺りも見ても跡形もありません。

お母さん生きとってよ，私，絶対探しに行くから生きとってよと心の中で叫びました。お母さんは看護師さんで，爆心地のすぐ近くにあった陸軍病院に勤めていたのです。これがお母さんの写真，これが陸軍病院の看護師さんとお医者さんたちの写真です。竹岡さんは次の日から，お母さんを探しに町のほうに出かけました。まだまだ火がぼろぼろ燃えていたので，防空頭巾をしっかり濡らして頭からかぶり出かけました。中心部の相生橋のほうまで来たとき，橋はもうぐにゃぐにゃでした。ここが竹岡さんがいらっしゃるところ。ここが先ほどの相生橋ですね。この相生橋の

Akita University

すぐ近くに陸軍病院がありました。

ここの川沿いで兵隊さんが何人もの死体を引き上げていました。兵隊さんにお母さんを探しに来たことを伝えました。兵隊さんが言いました。残念じゃったの。さっきまで生きとった医者も看護師も，みんな血を吹いて死んでしもうた。せめてもと思うて川から死体を引き上げてるんじゃ。お母さん，こん中にいるかもしれんから探してみるか。お母さんの特徴はと聞かれました。うーんと考えて，そういえばお母さん前歯に金歯が３本あることを思い出しました。それで，その 40 人の口の中を一人ずつ開けてみましたが，金歯は見つかりませんでした。兵隊さんが言いました。そうじゃろう。もうここにいた人は誰も生きちゃおらんよ。せめてあんただけでも助からねば。また B29 がやってくるかもしれないから早くお家に帰りなさい。

そう言われてとぼとぼと家に帰る方向に行きました。ふと思い出しました。相生橋のすぐ近くに親戚があったことを。もちろん家は跡形もありませんでした。ここがリビングだった，居間だった辺りを掘ってみると，大人の骨が出てきました。その向かい側を掘ると，ちっちゃい子どもの骨が出てきました。これはおばちゃんといとこの骨だわ。竹岡さんはハンカチを出して，その遺骨を包んでいました。すると B29 がやってくる音がしました。大変だ。ぐちゃぐちゃに壊れていましたが，防火用水の陰に隠れました。すると女の人が，背中は焼かれ亡くなっていました。でも，腕に抱かれてる赤ちゃんの足がとてもかわいくのぞいていたそうです。

生きてるかもしれない。竹岡さんはひっぱりだし，よしよし，よしよし。ほっぺにくっつけてみました。冷たかったんです。なんでこんな幼い子まで死ななければいけなかったんでしょう。学校で日本は勝つと，神風が吹くとあんなに言われてきたのに私たちは食べるものも勉強も着るものも我慢して，何のための戦争だったんだろう。怒りが湧いてきました。こんな戦争やめてしまえ。そう思ったそうです。

お母さんを探し歩いて６日目の朝，起きてみると髪の毛がバサっと抜けました。腕には紫色の斑点が出ました。体もすごくだるかったので，もう今日は行かれない。もうやめようと思って横になっていると近所のおじちゃんがやってきました。

ちいちゃん，毎日お母さん探してるようだが見つかったんかね。ああ，まだなんか。竹岡さんはもう今日はだるくて行けないことをおじいさんに伝えました。するとおじいさんが，ちいちゃん，お母さん待っとるよ。おじいちゃんが一緒に行ってあげるから，今日はもう一日頑張っていこうよ。そう言われて，おじいさんと一緒に，まだ今まで行ってない，この江波という方面に向かって歩き始めました。途中で歩いていた人は，この江波の小学校にたくさん収容されてるよ，いっぱい人がいるよと教えてもらいました。それで，小学校に着いてみました。すると，もう６日目だったので，廊下は死体が５段に積まれていました。教室の中を見ると，生きてるんだか死んでるんだか分からない人たちがうずくまっていました。

この人々が白く描かれてるのが分かりますでしょうか。これはうじ虫です。やけどをしてウミが出たところにハエがたかって卵を産み，うじ虫となって人々にくっついてるんです。おじいさんは言いました。おリョウさんよ，おったら返事してくれ。ちいちゃんと迎えに来たよ。そう言いながら一部屋ずつ歩きました。もう最後の一部屋になりました。おじいさん，この部屋にお母さんがいなかったら私もう諦めるわ。そう言って最後の部屋に入ったとき，教壇の一番前に寝かされていた人が，ちいちゃん。ちっちゃい声で言いました。

おじいさん，この人，ちいちゃんと言ったけど，お母さんかね。おじいさんが口元を開けてみると，金歯が３本見えました。ああ，おリョウさん生きとったんじゃあ。あんたに食べさせようと思って持ってきたんだよと言って，おじさんはポケットからトマトを一つ出しました。お母さんは美味しい美味しいと言ってトマトを食べました。ようし，トマトを食べたんならあしたおじいさん迎えに来るから，それまで頑張って生きておくんだよ。そう言っておじいさんは帰りました。竹岡さんはそれから２時間，３時間かけてうじ虫を取りました。母さんの右腕はやけどで黒くなっており，左腕にはガラスの破片がいっぱい刺さっていたそうです。翌日おじいさんは大八車という木で作った車を持って迎えに来ました。そして家に連れて帰りました。

近所のおばちゃんたちが来てくれました。１人目のおばちゃんが包帯を解いて，ぎゃあと言って失神してしまいました。もう一人のおばちゃんは，あれあれどうしたのと見ると片方の目が爆風で飛ばされ，ぶら下がっていました。そして鼻は折れて骨がのぞいてました。まあ大変なことになったねえ。息はしっかりできてるの。そう近くのおばちゃんが言いました。しばらくすると近くの小学校にお医者さんが来てると聞き，竹岡さんは必死でお母さんを小学校まで連れて行きました。でも薬もなかったので包帯を代えてもらうくらいしかできませんでしたが，連れて帰る途中お母さんがふと今の声，お父さんだったような気がすると言いました。お父さんもお母さんのあまりにも変わり果てた姿にお母さんと気が付かなかったのでしょう。竹岡さんはお母さんを家に寝かせて急いでお父さんのとこに行きまし

Akita University

たが，もうお父さんは次の小学校へ行った後でした。

その次の日，戸坂という町に食べ物もお医者さんもいて，そこに行くと診てもらえるよと聞いたので，台車に荷車のついたリヤカーという，この自転車に乗せて 2 時間も 3 時間もかけて戸坂までやってきました。着いてみると兵隊さんが言いました。医者も看護師も，さっきまで生きとったが，血を吹いて死んでしもうた。生きとるのは獣医だけです。獣医さんがなぜいるかというと，昔，兵隊さんは馬に乗ってたんです。それで獣医さんが必要だったんですね。その獣医さんがたった一人，いらっしゃいました。獣医さんは，お母さんの目を診て。すぐこの，ぶら下がってる目をくり抜かないと反対の目も見えなくなるばかりか，毒が体に回って死んでしまうよ。すぐ手術しましょうと言われました。

麻酔もない，消毒薬もない，痛み止めもない，そんな中での手術がどんなに危険なものか，看護師であるお母さんが一番よく知っていました。こんな手術，受けませんと言いました。竹岡さんは必死で説得しました。お母さん，もう広島にはお医者さんいないんだよ。ここで手術してもらわないと，お母さん大変なことになるよ。兵隊さんたちが教室の真ん中にござを敷き，４人の兵隊さんがお母さんの体を押さえ，手術が始まりました。ぎゃあという，うめき声と同時に手術は終わりました。連れて帰ってからも大変です。痛み止めも消毒薬も何もない中で看病しなきゃいけないんです。ただただ，タオルを濡らして目を冷やすしかなかったんです。

でも，お母さん，これから 20 年頑張って生きられたそうですが，一度も原爆のお話はされなかったそうです。竹岡さんは戦後 2 年目に結婚されました。そして，かわいい男の赤ちゃんが産まれました。近所のおばちゃんたちが来て，かわいいね，色が白くて，かわいいね。みんなに褒めてもらって，おっぱいをいっぱい飲んでスクスク育つと思っていましたが，18 日目，急に赤ちゃんが紫色になり，赤ちゃんは亡くなってしまいました。大きい病院に連れて行って先生に診てもらうと，これが原爆病ですよと，お医者さんが言いました。竹岡さんがお母さんを探すために放射線がいっぱいある市内を歩き回ったので，赤ちゃんに，それがうつったのかもしれません。

こんな残酷な戦争はやめてもらおう。原子爆弾もやめてもらおう。そのために絶対アメリカ行って訴えよう。竹岡さんは心に決めたそうです。1982 年，昭和 57 年，その夢がかないました。第 2 回，国連軍縮特別総会，ニューヨークであったんですけど，そこに呼ばれました。その当時，もう竹岡さんは二つも三つもがんに侵されていましたが，アメリカの皆さんに伝えました。アメリカの皆さん，私は命懸けで，ここまでやってきました。もう二度と戦争をしないで，原子爆弾，使わないでください，お願いしますと泣きながら訴えました。次の日の科学者の会議。そのとき，ここにいるジョン・モンゴメリーさんという人が泣きながら竹岡さんのところにやってきました。

竹岡さん，僕は申し訳ないことをしました。あの原子爆弾は僕が作ったんです。作ってるとき，こんな威力があるなんて思ってもみませんでした。広島の人には，本当に申し訳ないことをしました。どうか許してくださいと竹岡さんに握手を求めてきたそうです。竹岡さんは，この人の心の中にも平和の種がまかれたと握手を握り返したそうです。

４．私の夫の話（3 分 10 秒，916 文字）

では，ここから私の夫の話をします。夫は昭和 20 年の 7 月 19 日，この富士見町というところで生まれました。爆心地から 1 キロ余りのところです。8 月 6 日なので 2 週間目ぐらいですね。原子爆弾が落ちたとき，家は一瞬でぺちゃんこになったそうです。その日お母さんはお天気が良かったので，一生懸命お洗濯をしていたそうです。お兄ちゃんは，お庭で遊んでたそうです。

家の中で寝かされていた赤ちゃん，お母さんは，家がこんなにぺっちゃんこになったんで赤ちゃんは死んだと思ったそうです。逃げようと思ったそのとき，おぎゃあと泣いて，必死で家を探すと柱と柱の間に守られるように，赤ちゃんが寝てたそうです。お母さんは火の中を赤ちゃんとお兄ちゃんの手を引いて，北へ北へと逃げていきました。途中で赤ちゃんにどうぞとおむつを下さったり，産着を下さったり，こんな大変なときに皆さんの心がうれしかったと，亡くなるまで母は話してくれました。とても元気で，29 歳のとき私は夫と結婚しました。しかし 55 歳になって，食道がんが見つかりました。病院に行くと，原爆症ですと言われました。そのとおり肺がん，胃がん，肝臓がんと次々にがんが見つかる多重がんという原爆症でした。

夫が亡くなる 3 日前，ぽつりと言いました戦争さえなければ，今まで戦争の話，原爆の話，あまり夫としたことがなかったんです。子育ての話とか，会社でこんなことがあったというお話ばかりしてたので，戦争さえなければっていう言葉が，何か頭の片隅にしっかり残ってました。夫が亡くなった日，このツユクサって皆さんご存じですかね。秋田のほうでも咲きますか。このお花が庭中にいっぱい咲いていました。それで，冬になって枯れて，刈り取ったら，ちょっと読みにくいかもしれません。ツユクサ，被爆量が分かると書いた，ちっちゃな札が出てきました。

Akita University

被爆後64年たって，なぜ原爆症で亡くならねばいけなかったのでしょうか。生まれて半月だった夫に，何の罪があったのでしょうか。夫は私に，何を伝えたかったのでしょうか。私もある本を見ると，このツユクサは放射線を浴びると色が変わると書いてある本があったので，きっと夫もそれを見てツユクサをいっぱい植えてたのかなと思っています。

５．竹岡さんからあなたへ（1分1秒，417文字）

竹岡さんからあなたへ，これは竹岡さんが90歳になったとき，仲間と一緒にお祝いをしたときの写真です。こんな大きなケーキに，とても喜んでくださいました。いつも修学旅行の皆さんに話される言葉，皆さんの心の中に平和の種をまかせていただきました。平和の花を咲かせてくださいね。いつもこの言葉を伝えられています。

実は竹岡さん，昨年の12月31日，お亡くなりになりました。最後，膵臓がんだったとお聞きしてます。亡くなるまでの1カ月間，ホスピスにいらっしゃいました。その1カ月間，3回ほど看護師さんたちを集めて，講話されたそうです。それとこの3枚の文章を残しておられます。一番手前にあるのが，亡くなる4日ぐらい前に書かれたものではないかといわれています。一番最後に書いてある文章は，世界平和をみんなで築きましょうと書いてあります。娘さんに一番最後に残された言葉は，お話をずっとずっと継続していってね，話をずっとみんなに伝え続けてねという言葉だったそうです。

６．世界平和と核兵器廃絶のために（3分42秒，1,076文字）

皆さん，1万3,130，この数字，何だか分かりますか。現在世界中に存在する，核弾頭の数です。もちろん，ロシア，アメリカにほとんどあります。ただ中国，フランス，イギリス，パキスタン，インド，イスラエルなどいろんな国にもあります。私はいろんな国の方に，この体験談をお話ししたり，こういういろんな国の人を集めてのフォーラムとかを個人的にやってることもあります。これは2019人にJICAの方たちとの交流会の写真で，これは昨年11月にいろんな国の人を集めて，平和とは何かについてのフォーラムをしたときの写真です。

私はこの体験を通して，対話ってとても大事だなと思いました。一人ずつの国によって平和の考え方ってとても違います。ここにちっちゃく写っている，これモンゴルの少年なんですけど，僕の国では食べるのがやっとで，平和って言葉すら知らない人がほとんだよって言ってました。またコスタリカの男性は僕の国はもう軍隊もないし平和が普通すぎて，あらためて平和って言葉を考えたことなかったよ，広島に来て初めてそういうことを考え出したよというお話でした。それぞれの国の方がそれぞれの平和を持っておられます。それについて皆さんで話をするということが，とても大事じゃないかなと私は思っております。

世界平和と核兵器廃絶のためには，まず真実を知ること。そしてそれを伝えること。竹岡さんがおっしゃったように，それを継続し続けることだと思います。いつもこの絵を皆さんに見ていただいております。これは私の叔父が絵描きだったんですね。原爆が落ちたとき中学4年生でした。叔父はたまたまその日，宮島の近くの地御前という工場に仕事に出かけました。多くの同級生，下級生は市内で仕事をして，多く亡くなっております。叔父は生前，戦争の絵，原爆の絵，僕描けないよと言ってましたが，4年前に亡くなったときにアトリエでスケッチブックの中からこの一枚を見つけました。あ，叔父さんはこの絵を描こうとしたんだな，でも描ききれなかったんだなということが分かりました。それほど，亡くなった方はもちろん大変苦しかったと思いますが，生き延びた方も苦しい思いをした人生だったということを，ちょっと知っていただきたいなと思って，いつもこの絵を見ていただいております。

最後に，原爆詩人の峠三吉さんの人間をかえせという詩を読ませていただきます。

ちちをかえせ，ははをかえせ，としよりをかえせ，こどもをかえせ，わたしをかえせ，わたしにつながるにんげんをかえせ，にんげんのにんげんのよのあるかぎりくずれぬへいわを，へいわをかえせ。

ご清聴ありがとうございました。

＜質疑応答＞

00:52:56

○外池　佐々木さん，どうもありがとうございました。

○佐々木　はい，ありがとうございました。いかがでしたでしょうか。

○外池　それで，せっかくの機会なんで，学生たちたくさん聞いてますので，学生たちにちょっといろいろな感想，

Akita University

質問してもらおうと思ってますけど。じゃあ，学生の皆さん，どうですかね。何でも自由に聞いてください。

○男１　藤井君，手，上げてるんじゃないですか。

○外池　じゃあ藤井君，お願いします。しゃべるとき，顔出しでお願いします。

○佐々木　こんにちは。

○藤井　秋田大学の４年生の藤井陽平と申します。今日はありがとうございました。

○外池　佐々木さん，すいません。これ，画面共有，いったんちょっと止めてもらっていいですかね。そしたら多分，顔が見えてお互い。

○佐々木　大丈夫ですか。

○外池　お願いします。

○佐々木　ありがとうございます。

○藤井　今日は原爆体験した方の具体的な描写というのが自分はすごく心に残って，やはりそういうのは教科書に書いてないことで，秋田県にいれば知るのは難しいことだったので，すごく貴重なお話を聞かせていただきまして，本当にありがとうございました。そこで，自分は一つ質問させていただきいと思ってて，こういったお話をされるときに，どういったことに気を付けて話をされているのかなというのが気になったので，ぜひ教えていただきたいです。

○佐々木　はい，ありがとうございます。まず，私は竹岡智佐子さんという方のお話を伝承するという立場にありますので，今はもうお亡くなりになって聞くことはできないんですけども，まず，生前集まりで皆さんと勉強会するときに，何を一番竹岡さんは伝えてほしいのか，この言葉とか，こういう気持ち，このことだけは絶対忘れないでとか，そういうときの竹岡さんの熱量みたいなのを見ながら，私もそれに合わせて。多分ちょっと今日，ぴかっ，どーんって大きな声を出したのは，これ竹岡さんのリクエストだったんです。あそこを大きな声出してねって，いつももっと小さいもっと小さいと言われながら練習した覚えがあります。だから，ご本人のお気持ち，意志，それを尊重するようにしております。

○藤井　なるほど。分かりました。自分自身も，先ほど話を聞いていて，すごい印象に残っていたので，やはり，お話の本人の伝えたいことを，まず尊重して伝えるということが大切になるんですね。
　そして，もう一つ，質問いいですか。

○佐々木　はい。

○藤井　実は，これ去年，同じ質問をさせていただいたんですけども，海外の方々に講和されているかと思うんですけども，その海外の方と日本の方の反応の違いというのはありますか。

○佐々木　さっきちょっとお話ししたように，さっきモンゴルの少年は，食べるのに必死で平和なんて考えたことないみたいな，そういう，それぞれの国で平和の感覚っていうのがないし，まして広島県外の人からとっても広島市内って，ちょっと特殊かもしれないですね。広島大学には平和学っていうものがありまして，その平和学を習いに海外から留学生が今，コスタリカとか，フランス，コロンビアとか，いろんな国から来られていて，そこで平和学っていうものを初めて学んだって。平和って学ぶもんなんだみたいなことをおっしゃってたんで。やっぱり，その国々によって考え方が違うし，国の状況が違うし，アフリカのどこの国だったか，ごめんなさい，ちょっと忘れてしまったんで

Akita University

すけど，自分の国は，もう内戦がひどくて，平和っていうことを口にするということもないっていう状態で，そこを何とか生き延びることしかないっていう，平和の概念って，ものすごく違うなと思いましたけど，でもみんなが集まって話をすると，やっぱり穏やかに過ごしたいってことですよね。平和っていうこともあるけども，穏やかに日々を過ごしたいっていうところが，根底の願いなのかなとは思いました。

○藤井　分かりました。ありがとうございました。

○佐々木　ありがとうございました。

○外池　はい。じゃあその他，どうですか。せっかくの機会ですので。遠慮なく。

○佐々木　はい，どうぞ，遠慮なく。

○外池　誰だろう，今，手，上げてくれてた。

○男１　柳原君が上げてます。

○外池　じゃあ柳原君，お願いします。

○柳原　お話，ありがとうございました。

○佐々木　ありがとうございました。

○柳原　ありがとうございました。聞いてて，竹岡さんはいらっしゃらないんですけども，竹岡さんが話してるような感じの熱量で聴けて，良かったなというふうに思ってます。一つ質問なんですが，やっぱ原爆とかの体験を伝えるときに，ビデオとかで例えば実際に竹岡さんがしゃべっているところを録画して，それを見せて伝えるという方法とか，あと被爆した人の着てた服とか物とか，そういう遺跡とか使って，原爆の恐ろしさとか悲惨さとかを伝えることができると思うんですけども。今，伝承していただいて，伝承でなければ伝えられないとか，伝承の，他の戦争の悲惨さとかを伝える手段との違いって，何か今までやってて感じたこととかってありますか。

○佐々木　私自身が話し手ではなく人の話を聞いてなんですけども，朗読，ちょっと関わってるところで，大学生の方たちが朗読をされるっていう勉強会をしてて，体験談を聞いたの自分で20分ぐらいの文章にまとめて話されるっていう，そういう練習をされているところに関わってるんですけども，やはりその朗読，申し訳ないけど，つたない朗読でも本当に伝わるんですよね。

やっぱり生の声で伝えるってことは大事なんだなっていうのは，とても感じました。もちろん，それさえも無くなってしまうと，ビデオだったり本だったりしかないかもしれませんけど，でもこうやって伝えてつないでいくってことは，生の声で伝えることの大事さっていうのを，最近ちょっと心に染みてます。

○柳原　はい。ありがとうございます。自分も教師になりたいと思ってるので，自分は体験したかったことはないですけども，つたないことでも生の声で伝えることが大事だっていうことなんで。

○佐々木　本当に，そうだと。

○柳原　はい。大事にしていきたいと思います。

○佐々木　頑張ってください。

Akita University

○柳原　はい，ありがとうございました。

○外池　はい。じゃあ，その他，どうでしょうか。３年生とか２年生，どうですか。遠慮しないでいいんですよ。
　じゃあ，あれ，３年生で平和教育関係って誰だったっけ。いなかったっけ。

○丹波　丹波です。

○外池　じゃあ丹波君，お願いします。

○丹波　はい。今日は本当に貴重なお話ありがとうございました。

○佐々木　ありがとうございました。

○丹波　先ほど柳原さんのほうから出た質問とかなり重なる部分はあると。

○佐々木　はい，大丈夫です。

○丹波　はい。いろいろ，例えばNHKのほうで戦争証言アーカイブスという形で動画で保存されてる，戦争を直接体験された方の証言を動画で保存されてるものもあると思うんですけど，こうやって語り部の方が継承して，それを伝えていくっていうことの意義っていうのは，やっぱり生の言葉で語れる，伝えられるっていうところになるんですかね。

○佐々木　それは多分皆さんが感じられることだと思うんですけど，じゃあNHKのアーカイブス見たのと，今日聞いたのとでどう違いますかと私が聞きたいんですけども。多分，印象に残るのがちょっと違うような気がするんです。誰だったか，ある映画監督がそうやってニュースのように流されたものって残らないよって言われました。映画って芸術じゃないですか。映画のように誰かが語っていくっていうのは残っていくっていうふうに，芸術として残ってくって言われたんですけど。そうやって生の声で話しするっていうのは残っていくんだと思うんです。だからニュース映像よりは，生で語るほうが少しは皆さんの心に染みるんじゃないかなと私は自負して頑張っております。

○丹波　はい。僕自身も秋田にいるってこともありますし，身近に本当に戦争っていうものがない世代なので，本当に今日のお話は強いインパクトを持って，印象に残っております。本当にありがとうございました。

○佐々木　そうですか。ありがとうございました。

○外池　はい。じゃあその他，どうですか。２年生どうですか，初めて聞いた感じで。誰かいませんか。２年生，誰か平和教育とか。それじゃなくてもいいけど，いなかったっけ。じゃあ代表で浦島さん，お願いします。

○男１　松本さんが，先生。

○外池　誰かいた。

○男１　松本さんが，今，手を上げて。

○外池　ごめん，ごめん。松本さんお願いします。

○松本　すいません。

Akita University

○外池　いいよ，いいよ，お願いします。

○松本　２年生の松本直子です。本日はありがとうございました。私自身も広島の資料館に行ったり。

○外池　顔出しして，松本さん。

○松本　顔出ししてます。

○男１　顔出ししてますよ，先生。

○松本　はい。大丈夫です。

○男１　見えてない。

○松本　見えてます。

○男１　見えてる，見えてる。大丈夫ですよ。

○佐々木　大丈夫ですよ。

○松本　私自身も，家族旅行で広島の資料館に行ったことがあるんですけれども，そういうものとか，映像で見る戦争体験っていうのも，もちろん大事だと思うんですけれども，今回あらためて言葉で伝える戦争体験の良さっていうのを佐々木さんご自身からお伺いすることができて良かったなと思っています。
　一つだけ質問があるんですけれども，私たちの世代がそれに当てはまるかは分からないんですけれども，いつか戦争を経験した人と関わったことすらない人のような世代が，戦争を経験してない人への語り継ぎっていうのが今後絶対あると思うんですけれども，そういう戦争体験そのものを聞いたことがないような世代が，今後戦争はいけないものというか，平和の大切さっていうのを語っていく上では何が大切だと思われますか。

○佐々木　ありがとうございます。まず，松本さんがそれを伝えたいっていうお気持ちがあられたら，もうそれで十分だと思うんです。だから，本を朗読されても絶対通じると思うんです。ご本人が読まれて，とても感動したところとか，ここにちょっとポイント置きたいみたいなところ，多分本読まれるとあると思うんですね。そこを強調しながらしっかり伝えられると，それで十分だと思うんです。もう広島にいてさえ，なかなか被爆者の方にお会いするってもうないんですよね。特にコロナになって本当に会うこともないんですけど。それでもそういう気持ちがあって伝えようと思えば，きっと気持ちって伝わると思います。頑張ってください。

○松本　はい。ありがとうございます。じゃあ，以上です。

○外池　はい。ありがとうございます。じゃあ，その他どうですかね。大丈夫ですか。
　はい。じゃあ佐々木さん，実は私のほうからもちょっと聞きたいことは幾つかあるんですけど。
○佐々木　はいはい，どうぞ。

○外池　後ほどあらためてご連絡しますので，そのときに教えてください。

○佐々木　そうですか。はいはい，承知いたしました。

○外池　それで前にもちょっとお願いしてたんですけど，今日ご使用になったパワーポイントですね。あれ何か許可が必要なんですか。

Akita University

○佐々木　一応。大丈夫ですよね，パワーポイント。

○女１　多分，修正し直さないと。

○佐々木　先ほどの写真とかは，全部資料館のほうに申請を出して許可を得たものを使ってるんです。

○外池　なるほど。

○佐々木　もしそちらで使われる場合は，そちらでまた許可が要るようなことを。

○外池　いろいろ外部に出して使うってことではなくて，文字起こしさせていただいたりとか，私のほうでパワーポイントの内容分析で，例えば地図が何枚使われてるとか，写真が何枚使われてるとかっていうふうにして，外部に出すっていうんではなくて，資料の分析としてちょっと毎年使用させていただいてて。やっていただいた方，これまでも全員ご提供いただいてるんです。

○佐々木　そうですか。ちょっともう一度，啓発課の方と相談して，またお送りしますので，お送りできるようだったら。申し訳ないですけど。

○外池　分かりました。すいません。じゃあ貴重な話，本当どうもありがとうございました。

○佐々木　ありがとうございました。この後も聞かせてもらってもよろしいですかね。

○外池　はいはい。

○佐々木　長崎の方のお話も聞かせていただいてもいいですか。

○外池　もちろん，もちろん。そのまま聞いていただければありがたいと思います。

○佐々木　では顔を隠して聞きますので。

○外池　はい。じゃあ皆さん，反応で拍手なり何なりしてあげて，お礼を示してください。

○佐々木　どうもありがとうございました。

○外池　はい。お世話になりました。大変ありがとうございます。

○佐々木　はい。失礼いたします。

○外池　はい。ありがとうございました。

Akita University

資料 6

長崎市「交流証言者」水谷遥氏講和文字起こし（40 分 53 秒，12,071 文字）

○自己紹介，イントロダクション（2 分 44 秒，1,025 文字）

はい。じゃ，話します。私は，長崎市の語り継ぐ被爆体験，家族交流証言という推進事業に参加している水谷遥です。この団体は，被爆者の方が高齢化している今，直接本人から被爆体験をお聞きすることが少なくなっている中で，被爆者の家族もしくは交流のある方々が被爆体験を継承して発信していくという取り組みですね。

まず私自身の自己紹介したいんですけど，私自身は 2000 年生まれ，10 月 7 日生まれで，現在 20 歳，今年は 21 歳になる年ですね。この 10 月 7 日っていうのは長崎市のお祭りの日になっています。もともと長崎県出身で，現在は長崎の純心大学という，こども教育保育学科という，子ども関係の学科の 3 年生をしています。ふだんはアルバイト生活をしているので，皆さんと変わりのない生活を行っています。

そんな私が交流証言者として活動しています。交流証言者の活動としては，まず，皆さんみたいに，県外の方に向けた講話，オンライン講話だったりをしています。県内でも活動はしていて，長崎県内だと学校にも行ったりするんですけども，長崎市の資料館での定期講話を行っています。右側の，各メディアを通しての活動，例えばニュースに出たり，番組のゲストに出演したり，長崎の広報ながさきっていう広報誌に出たりしたりしてます。

これ，右側の写真，ツーショットの写真，右側は私なんですけど，左側，誰か分かりますかね。知ってる方いるかな。この左側の方，元欅坂の長濱ねるちゃんと一緒に，この間の番組を撮らせていただいて，そのときのツーショットですね。こんなふうに各メディアを通しての活動もしています。

これが池田道明さん，ちょっと左側，お写真小さいんですけど，池田道明さんがいらっしゃって，こんなふうに聞き取りしてから交流証言をしていきます。

今から皆さんにお話ししていくんですが，ちょっと前提として聞いていただきたいことがあって，まず私の交流証言は，そもそも小学生に対する講話が多いので，ちょっと小学生向けの内容になっています。

今回，時間の関係上ちょっとカットしてることが多いので，もしかしたら話の流れがちょっと，んってなるかもしれないけど，カットしてるんだなってことを願いします。

あと，私のパワーポイント，そもそもお写真のほうが少ないんです，資料とか写真が少ないんですけども，これに関しては，そもそも，池田道明さんって被爆者の方が，あまりそういう資料とか写真を使わずに講話をされてる方なので，私も必然的に資料とかが少ないです。

1．池田道明さんの被爆体験（19 分 4 秒，5,130 文字）

今回，小学生向けの講話をずっとやってきたので，例えばちょっと話しかけて講話を進めているので，癖で話しかけてしまうかもしれないんですけど，そのときは対応をお願いします。

じゃあ，話します。

池田道明さんは，当時 6 歳で，爆心地から約 700 メートル離れた長崎大学病院，当時は長崎医科大学附属医院と呼ばれていた場所で被爆しました。今日は，道明さんが体験したお話を，できるだけ多く皆さんに伝えていこうと思います。

道明さんの被爆体験講話に入る前に，道明さんから聞いた戦争中の暮らしについて皆さんにお話ししたいと思います。

太平洋戦争末期になると，敵の爆撃機が上空に度々現れるようになりました。そのため，夜は電気を消すか，もしくは電灯を布などで覆って，光が外に漏れないようにしながら生活をしていました。

もしも夜に光が少しでも家から漏れていると，そこで生活していることが敵にばれてしまうため，警防団，今で言う消防団の人たちがやって来てどなられていました。また，防空壕の中で泣いてる赤ちゃんを連れている母親は常にどなられていました。皆さん，なぜだか分かりますか。赤ちゃんの泣き声が，敵に居場所が分かってしまうかもしれないと思われていたからです。

しかし，爆撃機は上空の約 8,000 メートルの位置を飛ぶので，赤ちゃんの声なんか，本来は聞こえるはずがありません。それでも，自分の命が危ないかもしれない，敵に見つかるかもしれない。そう思うと人は変わり，ひどいこと言ってしまうと道明さんおっしゃっていました。

では，道明さんが実際に体験した被爆体験に移りたいと思います。なお，講話中は道明さん目線でお話しいたしますので，私は池田道明さんだと思って聞いてください。

Akita University

８月９日，当時，私は爆心地から約 700 メートル離れていた長崎大学病院の外科病棟で寝泊まりをしていました。なぜかと言うと，私の母親が，そこで患者と一緒に寝泊まりをして，身の回りの世話や雑用をする付添婦として働いており，浜口町の家にいては一人になるため，母について行っていたのです。

８月９日，この日は朝早くから空襲警報が出ていました。空襲警報とは，戦争時において，爆撃機による空襲を市民に知らせる目的で発令される警報です。そのため，患者や医師を含む多くの人が扇風機やクーラーのない地下室に避難していました。入っただけで暑苦しく，むっとする感じでした。

そして，警報が解除され，みんなが外に出て持ち場に戻ったため，私は何もすることがなくなりました。そこでシゲちゃんという同い年のお友達と一緒に遊ぶことにしました。シゲちゃんは，お母さんが入院していて，おばあちゃんが付き添い，シゲちゃんも一緒に大学病院で寝泊まりをしていました。シゲちゃんと私は同い年ということもあり，いつも一緒に遊んでいました。

２人で３階の建物の屋上に行き，爆弾の破片を，どっちが大きいほうを見つけるかという遊びをしていました。外にはたくさんの爆弾の破片が落ちていました。この破片は８月１日の空襲で落ちてきたものです。ほとんどの破片が消しゴムぐらいの大きさでギザギザしたものでした。

しばらくしてシゲちゃんが，あった。これはでかかばいと叫ぶので，行ってみると，シゲちゃんは通常の３倍にもなる大きな破片を見つけていました。先に大きい破片を見つけられて悔しく思った私は，シゲちゃんよりも大きな破片を見つけようと思い，また探し始めました。また，しばらくして，ミッちゃんと呼ばれ，今度は，トイレに行きたいけん下に戻ろうと言われました。私はまだ残ると言いましたが，シゲちゃんに，こればやっけんと言われ，先ほど見つけた大きな破片をもらいました。これが 11 時頃の出来事だったと思います。

２人は１階までエレベーターで下りました。１階に着き，シゲちゃんと先を争うようにエレベーターを出ました。そしてエレベーターから廊下に飛び出た瞬間，ピカッと大きな火花のような光が走り，私は気絶してしまいました。ピカッとした光は見ましたが，音は聞いていません。

煙の臭いとパチパチという音で気がつくと，目の前が真っ暗でした。そこで私は，しまったと思いました。当時，爆弾が落ちるときは，目を３本の指で隠し，耳に親指を当て，小指を鼻の穴に当て，口は開いたまま地面に伏せるという体勢を取りなさいと学校で言われていたのです。

ここで，一回，小学生たちには，こういうのをしてみましょうという感じで，実際にやってもらいます。そのときに，実際に自分がこの立場にいたら，この体勢すぐにぱっと取れますかという質問を投げかけます。でも無理ですよね。

それで，私は，この体勢を学校で取りなさいと言われていたのですが，一瞬の間に気絶してしまい，体勢が取れなかったので，目を失明してしまったと思いました。

しばらくして，周りの様子がだんだんと見えてきました。目はやられていなかったのです。

私は，さっきまで廊下に立っていましたが，周りを見てみると，爆風で廊下の板が剝がれていました。私は廊下の地面に転がっていましたが，無傷でした。どうにかよじ登っていくと，床はガラスの破片でいっぱいでした。

そしてゆっくり廊下を進むと，看護師が１人いましたが，白いナース服は，血をバケツに入れて頭からかぶったかのように真っ赤に染まって，頭や体には，無数のガラスが突き刺さっていました。その看護師に，警防団ば呼んでこんねと大きな声で言われ，その看護師の迫力に，行かなければ怒られると思った私は，中庭に飛び出しました。

ふだんは花や草木がいっぱいで，憩いの広場だった中庭は，火の海となっており，たくさんの人が倒れて，死んでいました。髪がチリチリになっている人や，目が飛び出して頬に垂れ下がっている人，唇もめくれて，歯がむき出しになっている人，服も皮膚も真っ黒に焼け焦げ，足や腕，おなかは２倍ほどに膨れて死んでいる人が何人も何人もいました。そのため，家族であっても，その遺体が誰か分からない状態でした。

私は，８月１日にあった空襲と同じ爆弾が，大学病院にたくさん落ちたのではと思ったので，病院から出れば助かると思い，病院の外に出ました。しかし，病院の外に出ると，大学の中よりもひどい状態でした。

ふだんは人が通っていた道は既になくなっており，葉っぱが青々と茂っていた木や建物などは全て倒れ，畑は全て吹き飛んでいて，中庭と同じように，町中も火の海でした。

そして，私は，けがもやけどもしていない別の若い看護師と病院の出口で会い，一緒に山に逃げることにしました。逃げる途中，黒い大粒の雨が降りましたが，すぐにやみました。あんなに晴れていたのにと思い，空を見てみると，空は真っ黒でした。後にそれは黒い雨と言われる，放射線物質を含んだ雨でした。

さらに山を登っていると，私の近くにいた人たちが，自分の身を守るように，ばたばたと伏せていきました。どうしたんだろうと思いましたが，グラマンという戦闘機が低空飛行してきました。私は看護師と畑の真ん中にいたため，

Akita University

白いナース服が目立ち，グラマンの標的になってしまうのではないかと思いましたが，戦闘機は横にそれ，撃たれることもありませんでした。

その後，一緒にいた看護師と離れ，道の広いところで休憩をしていました。たくさんの人々が私の目の前を通る中，１人の女性が私の隣に座ってきました。その女の人は，背中に赤ちゃんを背負っていましたが，よく見ると，その赤ちゃんは，首がだらんと落ちて，息をしていませんでした。既に亡くなっていました。

私が，おばちゃん，赤ちゃん死んどっばいと伝えたところ，その女の人は，赤ちゃんを抱き締め，名前を呼び，人目を気にせずに大声で泣きました。

私は，大人の人が大声で泣くのを初めて見たので，どうしていいか分かりませんでした。通り行く人も，ふだんなら優しそうな人でさえ，その光景に目を向けず，ただひたすら歩いていました。この時代，自分の命も保障されていないのに，人のことなんて構えなかったのでしょう。そのとき，戦争は，人の心でさえも変えてしまうのかと私は強く思いました。

夜なっても市街地は燃え続けており，空は赤黒い色に染まっていました。９日の夕食は，兵隊からもらった２枚の乾パンだけでした。そしてその日は，いつの間にか眠っていました。

翌朝，大人の人たちが，山を下りて家に向かう話をしていましたが，初めて登った山で，帰る道が分からなかった私は，大人について山を下りることにしました。途中で家族を探して歩くたくさんの人が浦上方面に向かって歩くのを見ましたが，誰一人言葉を発さずに黙々と歩いていました。長崎駅の近くを通りましたが，建物などは焼けてしまっていて何もありませんでした。本来ならば木や建物などが建っていましたが，既に倒れていました。

ようやく大学病院の近くにある山王神社までたどり着くと，向こう側から長崎大学の先生たちが歩いてきました。

その中の１人で，ミッちゃん，生きとったとねと言ってくれた人がいました。その先生は古屋野先生といい，のちに長崎大学の学長になる人でした。古屋野先生はお母さんの勤め先と同じ外科病棟の先生だったので，私のこともよく知っていて，私のお母さんが元気だったことを話してくれました。

大学病院に行くためには，坂を上っていかなくてはなりません。その坂の手前の焼け跡に水道管が１本ありました。その水道管は蛇口が壊れており，水が流しっ放しになっていました。そこには何人かの人が並んで水を飲んでいました。

大学病院に着いたとき，ミッちゃんと言いながら，シゲちゃんが走ってきてくれました。どこ行っとったとね，おばちゃんは心配しとったよ。シゲちゃんは私のお母さんの様子を伝えに来ました。おばちゃんはけがして寝とるとも言われました。それを聞いた私は，古屋野先生は元気と言っていたのにと思い，慌ててお母さんのもとに行きました。お母さんは病院でうつ伏せに寝ており，背中には100個ぐらいのガラスの破片が刺さっていました。お母さんを見たとき，初めてぼろぼろと涙が出てきました。

お母さんは，私に，これまでのことをいろいろ聞きました。爆弾が落ちてたときはどうしていたのか，どうやって逃げたのか，ご飯は食べたか，どこで寝たかなど，いろいろ質問してきます。それに私は答えました。お母さんから，おまえも疲れただろうから，脇のベッドに寝なさいと言われましたが，私は，疲れたけどシゲちゃんと遊ぶと言って中庭に行きました。

中庭には出てみたものの，まだ燃えていて，煙も立っていました。そんな状態なので，遊ぶ場所もありません。そこで，別の病室に，生き残った３人の患者さんから呼ばれ，会いに行きました。

ちょっと，ここ飛ばしますね。

病室の脇に，当時，お酒やしょうゆを入れていた空の一升瓶があるのに気づき，それを手に取って，３人のおじさんたちに，水をくんでくると言って，シゲちゃんと一緒に外に出ました。

水をくんで病室に戻ろうとする道の途中に，３人の人が倒れているのに気がつきました。熱線を浴びたせいで服も皮膚も真っ黒になっていました。私が水を持っていたからか，３人のうちの１人と目が合いました。

そこで，私はその人の口に一升瓶を持っていきました。すると，その人は水をごくごくと飲み，はあーと大きなため息をつきました。私は，ふだんなら，おいしいとか，ありがとうとか言うと思っていたのですが，その方は，大きな大きなため息をついただけでした。

その後，私はまた戻って水をくみ，大学病院へ戻ろうとすると，さっき水をあげた人が亡くなっているのに気がつきました。私は急いで病室に戻り，この話を病室にいた人たちにしました。

すると，病室のおじさんたちが，ミッちゃん，心配しなくてもいい。その人たちはね，もう水を飲んでも飲まなくても死ぬ運命だったんだよ。だからね，ミッちゃんに死ぬ前においしい水をもらって安心して亡くなっていったんだ。だから何も心配することはないと言われました。

Akita University

後で考えると，私が水をあげた人たちが，ありがとうでもなく，おいしいでもなく，ただ，はあーという大きなため息をついたのは，約 2,000 度にもなる熱線を浴びていたので，声を出す声帯がやられてしまっていたからだったかもしれません。もしかしたら，大きなため息ではなく，本当はありがとうと言ったつもりだったのではと，今は思っています。

10 日の午後になり，田舎に避難していた姉が私を迎えに来て，けがをしているお母さんを病院に残し避難することになりました。この日以降，私はシゲちゃんに会っていません。お別れの言葉を交わすことなく，2 人はばらばらになってしまいました。

2．池田道明さんがお母さんに聞いた話（1 分 5 秒，512 文字）

ここまでが，当時，道明さんが体験したお話です。

ここからは，ややこしくなるんですが，道明さんがお母さんに聞いた話ですね。

お姉さんと道明さんが帰った日の夜，シゲちゃんとシゲちゃんのおばあちゃんが同じベッドで寝ていました。すると，シゲちゃんが，おばあちゃん，もっとそっちに行って，苦しいと言うのを，道明さんのお母さんは聞いていました。でも，そのとき，長崎は停電によって夜は真っ暗で，お母さんはシゲちゃんたちを確かめることができませんでした。

すると，翌日 11 日の朝，シゲちゃんのおばあちゃんは亡くなってました。シゲちゃんが苦しいと言ったのは，おばあちゃんの死の直前の悲しみから，シゲちゃんに寄りかかっていたためでした。その翌日には，後を追うように，シゲちゃんのお母さんも亡くなりました。もともとシゲちゃんのお父さんは学校の先生をしていましたが，戦争に駆り出され，フィリピンで既に戦死していました。シゲちゃんは養ってくれる家族がいなくなったため，戦災孤児になってしまいました。

その後，道明さんは何年も何年もシゲちゃんの姿を追い続けましたが，シゲちゃんの本名ですら不明であったため，1945 年の夏以降，シゲちゃんと確信できる人に会っていません。

3．池田道明さんの願い（2 分 3 秒，608 文字）

池田道明さんから被爆体験の聞き取りをしていく中で，道明さんが次のように話してくれたので，皆さんにも紹介したいと思います。

戦争さえなければ，シゲちゃんも戦災孤児にはならなかったと思います。シゲちゃんだけではありません。戦争に負けた日本は，とても多くの物を失いました。いい食事は何もありません。そこからの復興をしようと，日本は働いて，働いて，利益を上げました。そして日本の評価は上がっていきました。そして現在，日本は世界でも有数の豊かで平和な国となったのです。

この今ある平和は，決して自然にできたものではありませんでした。戦争により何千万という人が亡くなり，こういう人たちの涙や血の犠牲の上に今日の平和があります。

皆さん方は平和の中で生まれ，平和の中で育って，あしたももちろん平和だと思っていますよね。あした死ぬかもしれないなんて考えていないでしょう。当時，毎日が死との隣り合わせでした。飛行機の音がするたびにぎょっとして，防空壕に入ったり，山に逃げたりしていました。ですので，平和がいかに大事か，これからたくさん学んでいってください。

私たち語り部も，あと 10 年後，被爆体験講話を話せるか分かりません。生きていたとしても，声が出るか分かりません。動けるか分かりません。10 年たち，20 年たつと，皆さん方がこの日本を背負っていくことになります。皆さん，これからの日本をどうぞよろしくお願いしますと道明さんはおっしゃっていました。

4．平和の尊さ（45 秒，229 文字）

これまで皆さんに，池田道明さんの交流証言をお伝えしました。

さて，皆さんの考える幸せは何でしょうか。おなかいっぱいにご飯が食べられること。学校に通えること。ベッドや布団で寝れること。家族や友達がいること。皆さんの幸せは，全て平和な世界だからこそ成り立っていると思いませんか。

本日の交流証言が，皆さまにとって，過去を知り，現在の平和の尊さを改めて考えるきっかけとなれば幸いです。私は，多くの人にこのようなきっかけづくりを，これからも行っていきたいと思っています。

Akita University

5．学生への質問（1 分 10 秒，365 文字）

これで，家族交流証言，以上なんですが，ちょっと秋田大学の学生さんに聞きたいことがあって，私，今 20 歳で，被爆体験はもちろんなくて，そういう被爆体験がない，例えばあなた，被爆体験のないあなたが，小中学生に交流証言もしくはそういう原爆について，平和に関する授業をする機会があるとして，そのとき，子どもたちが，自分自身と関連づけて何か考えるためには，あなたなら，例えばどんな工夫をしますかっていうことを，皆さんにちょっと聞いてみたくて，先生にもお願いして，これいいよって言ったので，ちょっと皆さんに聞くんですが。

この回答の中で，今の生活と昔の生活を単純に比べるという回答以外で回答していただきたくて。これに関しては，ちょっとひとひねりあれば全然大丈夫なんですが，これの回答方法は，先生のほうから，多分，指示があると思うので，お願いします。

＜質疑応答＞

○外池　水谷さん，どうもありがとうございました。それで，今日の，佐々木さんと水谷さんの講話を併せて聞いてくれた学生の皆さんには大変申し訳ないんだけど，感想とか意見を，ウェブクラスのほうにフォーマットを上げときましたので，7 月 30 日までに，PDF にしないで，Word 形式で，その後の処理の関係で，Word 形式で出してください。

それで，併せて，水谷さんから今，言っていただいたリクエストがあったので，別バージョンで，もう一つ，水谷さんからのアンケートですっていうのを上げてあります。それで，せっかく水谷さん，お話ししてくれて，水谷さんからもご協力くださいというお願いなので，皆さんたち，特に教員養成系で先生を目指してる人たちなので，何かいろいろ，これまでも社会科教育で切実性とかいろんなことやってきてるので，具体的なアイデアがあれば書いてください。

それで，そのアンケートと併せて，7 月 30 日に，同じように僕のほうに提出してくれれば，僕のほうで取りまとめて，水谷さんに渡したいと思ってます。よろしくお願いします。

それじゃ，ちょっと水谷さん，いいですね。じゃあ，水谷さんのほうで，今度は，質疑，感想，意見，何でも，皆さん，どんどん言ってあげてください，お願いします。遠慮しないでいいですよ，どんどん言ってください，せっかくの機会なんで。

じゃあ，福田君，お願いします。

○福田　はい。発表，お疲れさまでした。自分が 20 歳のとき，何してたかなっていうのを考えると，こんなすばらしい話をしてたわけじゃなくて，ただのうのうと過ごしてたなと思って，すごい，この姿勢を見習いたいなと思って聞いていました。

幾つか気になったことを聞きたいんですけど，まず，この交流証言者になろうと思ったきっかけって，どういうのあったのかなっていうのをお聞きしたいです。

○水谷　はい。私はもともと交流証言の前に，青少年ピースボランティアっていう，長崎をガイドするボランティアをしていて，その長崎のボランティアって，それこそ平和に関する，原爆資料館だったり，原爆中心碑とか落下中心碑とかを案内するボランティアをしていて，その担当者の人が，この家族交流証言の担当者と一緒だったんですね。で，この家族交流証言の交流会が一番最初にあるから，参加してみないって誘われたのが一番のきっかけで。

その交流会っていうのが，私が行って，被爆者の 6 人の方，そのときは 6 人の方の被爆体験講話を聞くっていう交流会だったんですけど，そのときに池田道明さんと初めてお会いして，池田道明さんのお話を聞いて，そういう家族交流証言っていう活動があるんだって知って，誰かがしなきゃいけない現状にあるってことは，自分がやっちゃったほうが早いと思ってやったのがきっかけですね。

でも，その青少年ピースボランティアのほうも，もともと自分がしようと思ってそういう活動をしてたわけじゃなくて，本当にたまたま誰かに誘われてついて行ったとか，たまたまこの人に会ったとかの，本当に偶然が重なって，今こういう活動させていただいてるので，あんまり平和に対して何かしなきゃってもともと思ってたわけじゃなくて，流れでここまで来たって感じではありますね。

○福田　はい，ありがとうございます。なんかたまたまの連続っていう話もありましたけど，結局，自分がやらなきゃって決めたところに，すごいこの決断力と人柄の良さっていうのが表れているので，すごい人だなと思いました。

Akita University

もう一つなんですけど，まだ駆け出しって言ったらあれですけど，やり始めた頃だと思うんですけど，若い世代に，もっと何かこういうこと考えてほしいなとか，水谷さんが今，先駆けとなっている状態なんですけど，もっとこういうことを考えてくれればいいのになって思うこととかありますか。

○水谷　私は，そもそもそんなに，あんまりそれこそ平和活動やろうと思ってやった側ではないので，まずは皆さんに知ってほしいというのが一番ありますね。長崎でこういう原爆があって，こういう人たちがいて，こういう人生を送ってきた人たちがいるっていうのを知ってほしいっていうのが一番の思いで。
それこそ池田道明さんの話を聞いたときに，この人の話をたくさんの人に聞いてほしいと思ったのがきっかけなので，そういう事実があったっていうきっかけを，いろんなきっかけってやっぱあると思うんですけど，そういういろんなことを知ってほしいっていうのは一番ありますね。

○福田　ありがとうございます。これからも頑張ってください。ありがとうございました。

○外池　そのほかいかがですか。なんか珍しくあれですね，遠慮しないでどんどん言ってもらっていいんですよ。

○柳原　じゃ，柳原，いいですか。

○外池　はい，どうぞ，どうぞ，はい。

○柳原　はい。ありがとうございました。やっぱりすごい自分より若いのにすごいしっかりしゃべってるなと思って，自分も見習いたいなと思いました。
最初の紹介のところで，小学生の方とかに話すことが多いよってお話ししたと思うんですけども，なかなか自分自身も，小学校からそれこそ高校まで，戦争の被爆者の方のお話だったりとか，戦争のことについて，誰かからお話を聞くっていう機会がない，秋田県自体，そんなにそういう機会がないと思うんですけども，小学生にこういうお話して，どんな感想だったりとか反応が見られるのか，ちょっと自分の中では，そういう経験が乏しいので，ぜひそういう反応とか教えていただけたらと思います。お願いします。

○水谷　小学生の反応ですよね。そもそも，よくこういうふうに被爆体験交流証言をお話しするってだけじゃなくて，小学校に行くときは，小学校の先生と打ち合わせをして，私はなるべく先生がどんなことを伝えたいのかっていうのを聞くようにしていて。
やっぱ先生によって，ちょっと食事関係で関連させてほしいっていうときもありますし，私自身，交流証言者っていうことに目線を当てて話してほしいというの，いろいろあるので，先生によってもいろいろなんですけども。
今までは，例えばご飯と関連させて，今の生活が当たり前じゃないってこと。ご飯がちゃんと全部毎日３食食べれるってことは当たり前じゃないっていうこと気づいてほしいっていう要望があれば，やっぱそっち関係の話になるので，子どもたちの感想も，給食をちゃんと食べようと思いましたとか，好き嫌いすることがすごい無駄っていうか，もったいないことに気がつきましたっていうことだったり。
家族交流証言者っていうことにスポットを当てて話すときは，本当にこういう人がいるって知らなかったし，若い人がこういう被爆体験講話を話すことにびっくりした。ってことは自分たちもできるんじゃないかなって思いましたっていう意見をもらったり，本当にいろいろですね。

○柳原　例えば，小学校の先生のほうから，食べ物に関することを教えてほしいってなったときは，それは，水谷さんが自分で，その当時の戦時下のことを調べて，それを伝えるっていう感じですか。今は，家族関係者の方から聞いたお話を伝えてると思うんですけど，そのときは自分で調べるんですか。

○水谷　もともと池田道明さんから聞いた戦争中の話っていう情報がいっぱいあるので，その中から選別してお話ししたり，それこそ長崎原爆のアニメとかがあるんですけど，それを用いて見せたりしますね。

Akita University

○柳原　分かりました。ありがとうございます。

○外池　どうもありがとうございます。じゃあ，そのほかどうですか。

○林　林です。いいですか。

○外池　はい，お願いします。

○林　はい。今日は講話，ありがとうございました。自分と同世代の方がこのように継承しているというところに，すごく，その継承がつながっているんだなって思うと，なんか感動しました。
　私からは質問が一つあります。小学生に講話する機会が多いっていうふうにおっしゃってたんですが，小学生に講話する際に，工夫とか，何かしてることがあったら教えていただきたいです。

○水谷　はい。今回，パワーポイントを皆さん向けに作ってるパワーポイントなんですけども，やっぱり小学生だと情報が少なすぎる。
　それと，あと，やっぱり話をずっと聞いてるだけってすごい飽きるじゃないですか。私も嫌なので。だからなるべく小学生のときはパワーポイントを変えて，ちょっと子ども向けのイラストとか，そういうのを多く使ったパワーポイントにしたり。
　講話中によく私，しゃべりかけちゃうんですよ，子どもたちに。これどう思うとか，こういうとき，みんなだったらどうするとか，そういうのをよく入れてますね。

○林　私も小学校の先生になりたいと思ってるので，とても参考になりました。ありがとうございました。

○外池　じゃあ，そのほかどうですか。３年生，２年生いいんですよ，遠慮しないで言ってください。
　じゃあ，松淵さんどうですか。

○松淵　はい。水谷さん，今日はありがとうございました。多分，誕生日１カ月くらいしか違わないので，びっくりしました。
　今日の発表を聞いて，１点質問があって，さっきの水谷さんからの宿題というか課題についてなんですけど，戦争を体験してない若い世代が，自分ごととして捉えることにするためにどんな工夫を皆さんしますかっていう課題なんですけど，それの自分ごととして捉えることの意義とか意味を，水谷さんは，どういうふうに捉えているのかなっていうのが質問です。

○水谷　私自身が，そんなに長崎原爆に関して，自分ごととして考えれなかったっていうのがあって，やっぱり小学生って，すごい，まだあんまり分かんないじゃないですか，人生についてというか。その中で昔のことを言われても，どこか他人ごとに感じられてしまうっていうのがちょっとあるのかなと思って，それに関して，何か他人ごとって考えれないような工夫が何かあれば，皆さんの意見を聞きたいなと思って。
　特に定義とかはないので，何かこういうのをやってみたらいいんじゃないっていうアドバイスというかがあればうれしいなと思って書いてみました。

○松淵　ありがとうございます。多分さっきの池田さんの話だと，６歳くらいって言ったので，小学生も同じくらいかなっていうふうに感じてて，水谷さんと私も多分同い年なので，多分，その同じくらいの年っていうだけで親近感はあるのかなっていうふうに自分でさっき感じました。ありがとうございます。

○外池　はい，ありがとうございます。じゃあ，そのほかどうですか。２年生，誰かいませんか。２年生，誰かいない。
　じゃあ，浦島さんどうですか，代表して。

Akita University

○浦島　はい。本日は，お話ありがとうございました。先輩たちも言ってたんですけど，同世代の，多分私の１個上だと思うので，継承の活動されてるっていうのがすごいなと思いました。

質問というか，ちょっと個人的なお話になってしまったら申し訳ないんですけど，子ども関係の学部ですか，大学。水谷さん自身，この継承は継承で活動されてて，本当，将来の職業というか，そういうのは関わってるのかなと思って，この継承活動に。そういうわけじゃなくて，幼稚園関係とかですか。

○水谷　もともと最初に青少年ピースボランティアに入ったっていうのが，高校２年生のときの話で，高校２年生のときは小学校の先生になりたかったので，将来の夢的には，子どもたちと何か関わることがしたいなと思って，それがたまたま青少年ピースボランティアっていうもので，たまたま平和関係だったので，一番ちっちゃいきっかけは子どもと関わりたくて平和活動したってのはちょっとだけあります。

で，今大学生になって，学部もこども教育保育学科に入って，一応子ども関係のことを学んで，今の学科が，保育園の免許，幼稚園の免許と小学校の免許，３免とも取れる学科なんですけども，私自身が，小学校の先生になることに関して，ちょっと無理だなって思っちゃって。

平和活動していく中で，やっぱり先生側に立って話すことが多くなって，子どもに対して何か教えるってことに，私これ無理だって感じちゃって，先生になるということはやめたんですよね，大学１年生のときに，悟って，もう無理だって。

今の将来の夢的には，やっぱり一般企業に就くことなんですけども，もともと子どもと関わりたかったっていうのもありますし，逆に，私はこの平和活動をして，小学生といろんな関わる機会，先生側に立って何か教えるってことをしなかったら，このまま小学校の先生を目指してたと思うので，そういう現実，自分自身の現実を知るきっかけにもなりました。

○浦島　はい，ありがとうございます。すごい自分にもいい刺激になりました。ありがとうございます。

○外池　はい，ありがとうございます。じゃあ，皆さんからまだありますか。大丈夫かな。

では，私のほうからも，後ほど，水谷さんにいろいろ聞きたいことありますんで，改めてお願いします。それで，じゃあ，水谷さんに，また皆さん，拍手の反応でよろしくお願いします。はい，じゃあ，どうもありがとうございました。

それで，皆さん，長い時間聞いてくれて，学生の皆さん，どうもありがとうございました。

それで，さっき言ったみたいに，ウェブクラスのほうで，広島と長崎のほうの話を聞いた感想ということで，あとは水谷さんのほうからリクエストされてるアンケートということで，二つ，７月 30 日までに，さっきも言いましたけど，PDF じゃなくて Word 形式で，僕のアドレスのほうに直接添付する形で提出をお願いします。

あと，事務連絡で何かあります，皆さんたちのほうから。今週ゼミがないので，この機会で何か連絡事項あれば。加納先生，何かあります。

○加納　僕のほうはないです，大丈夫です。

資料９　2021年度広島市「被爆体験伝承者」佐々木佐久子氏・長崎市「交流証言者」水谷遥氏講話アンケート結果

	１広島市「被爆体験伝承者」講話	２長崎市「交流証言者」講話
1	***実際に、おじいさんや竹岡さん、旦那さんの話から具体的なお話があったので、ゆったり落ち着いた口調の中から切実な気持ちを感じることができました。***お話の中で、絶対に戦争の話をしたくない当時の人もいた中で、自分の体験を伝えようとした竹岡さんの使命感がすごいと思いました。***また、具体的に数字や被害や、写真などの悲惨なものを見せるより、○○ちゃん、など私たちにも身近な言葉で優しく語りかけられるように言われた方が心にきました。***ツユクサが放射線で色が変わるという話を聞き、これまで青くてきれいだなと思っていただけの花を見るたび、意識が変わってくると思います。「平和の種」という言葉があり私たちはこのような講和をきっかけに自分で考えることで、平和の花を咲かせていく（行動する）ことにつなげる必要があると思いました。きっかけだとしても０を１にするきっかけをくださりありがとうございました。	毎年思いますが、私より若い人が活動をしていることに感動すると同時に自分もしっかりしないとなと感じました。しかしきっかけが偶然が重なったとの話を聞き崇高な使命感などを持つことに自信がない自分でも、平和のきっかけとなる活動をしてもいいんだ、と勇気をもらいました。小学生向けの講和ということで、話し方や言葉などの工夫や、発達段階を考えた言葉選びなどいろいろなことに気を付けて講和を作っているのだろうなと思い、参考にしたいと感じました。秋田県にも戦争が関わっていた、ということを大学で理解し、教師になった際にも平和教育にも力を入れていきたいので参考にしたいです。また、爆弾が落ちた時の体勢を子どもたちに実際やらせてみてそれが急にはできないことも体験させてみることで子どもたちが追体験できるなと感じました。
2	***竹岡さんと旦那さんの話を聞いて、原爆が落ちた音の再現や話し方から、切実感が感じられ、体験談を実際に聞くことの意義を感じました。***また、実際に原爆を体験した方々の中には、本当につらい思いをしていることから口にしたくない人が多くいる中で、平和を願い自らの体験を語ってくれている人々がいることが、勇気もいることだし相当な覚悟もいることなので、すごいと感じました。絵や映画などの動画を見ることでも、戦争の悲惨さ、被害者の苦しみは感じられますが、実際体験した人の話を聞くことでフィクションではない、実際にあったこと、という認識が深まると思いました。 竹岡さんが国連の場でお話をした後に、原爆の開発者の一人が声を掛けてきたことについて、科学者の人々は必ずしも悪意を持って作ったのではなくて、兵器として使われた被害者とも言えるのではないかと感じました。	自分と同じ年代の方が、このように戦争体験者の意志を継いで戦争を忘れない活動に貢献していることに感動したし、より切実感を感じました。このような交流証言者が若い方にも引き継がれていっていることを感じ、安心もしました。また、私は小学校の教員を目指しているため、小学校での講話が多い水谷さんのお話はとても参考になりました。小学生は、戦争についての学習をしている子どもが少ないため情報が少なく、そのような状況でどのように話を聞こう、と言う姿勢に持って行くのか、どのように理解してもらうのか、ということを発達段階など考慮しながら考えていかなくてはならないことを感じました。小学生にとって過激な絵や映像は扱うことができないため、そのなかでどのようにして切実感を感じてもらうのかが課題だと思いました。
3	今回は貴重なお話しを体験させていただき、ありがとうございました。強調したい内容・擬音などの表現方法はとても勉強になるところが多く､終始引き込まれました。是非参考にしていきたいです。 川から遺体を引き上げていたり、数多くの死体の中から母の特徴を探していたりしたシーンが、資料を用いて表現することで当時の描写が鮮明に浮かんできて、被爆の悲惨さを再認識させられました。戦争の後遺症で多重がんに苦しまされたことについて、もしも私の家族が同じような境遇にあったら、ぶつけどころのない怒りがこみ上げるだろうと思い、改めて金輪際不毛な戦争は起きてほしくないと感じました。佐々木さんが終盤で主張していた「平和とはなにかを対話する」ことは今後の変化著しい社会においてとても重要であると感じたので、私自身も実践していきたいと思います。	今回は貴重なお話しを体験させていただき、ありがとうございました。ほぼ同世代の方が、歴史の証言者として第一線で活躍していると知り、その姿勢と行動力を、私自身見習っていきたいと感じました。***主に小学生向けの講話と言うことで、今回は省略されていましたが、質問や会話を多く取り入れることはとても有効的だと思います。子ども達と一体となって講話を進めることで、水谷さんの人柄とマッチしてより充実した講話が行われているのだろうと想像できました。***一升瓶に入れた水を飲んで「ありがとう」の言葉が出てこないことに疑問を抱いていた、実は声帯に損害を負っていたのではという内容について、私もそのうめき声のような音は「感謝」だったのではないかと感じました。戦争の悲惨さを私も忘れず、伝えるようにしていきたいです。
4	今回は講話ありがとうございました。***最後の質問にもありましたが、正直私も今回はリモートであり、会話ではなく語りであるため、資料映像と大差ないのではと思っていました。しかし実際に講話を聞いてみると、佐々木さんが体験者の意向を忠実に再現しようとし、かつ佐々木さん自身が思いを重ねて私達に講話してくださったことを感じることができ、再度考え直すきっかけにすることができました。***内容に関しては、竹岡さんがお母さんを探しているときにおじさんが「一緒に探そうか？」と声をかけてくれた場面が印象的でした。そんな地獄のような状況で、自分のことだけではなく、他人を思い合えることに衝撃を受けました。教科書では政治的な側面が多く掲載され、庶民の心の機微までは想像することができなかったので、今後は自分も調べたり、将来の生徒に考える機会を与えられたりすることができるようになりたいと思いました。	今回は講話ありがとうございました。感想を書きながら、問いかける以外で水谷さんがしている子ども達が自分事と感じるための工夫がどのようなものなのか気になりました。内容に関しては、体験者の方がお母さんに「しげちゃんと遊んでくる」と言って離れた場面が印象的でした。私は、体験者の方が本当はしげちゃんと遊びたいのではなく、お母さんに変わらない自分を見せたかったのではないかと考え、人のとっさの思いやりの強さを感じました。自分だったら、泣き崩れ、絶望の内に干からびると思ったので、なぜそう言うことができたのか気になりました。こうした疑問は、資料や記録からは読み取ることが出来ないので、***やはり人に直接聞いたり、自身で体験したりする大切さを改めて感じました。今後は、自分が経験したり、発信する側に立ってみたりすると共に、自分事と捉える方法についても考えていきたいと思います。***
5	３名の話に共通して、原爆の被害の描写が非常に具体的でリアルだった。これは教科書を読むだけでは分からないことだし、秋田県にいれば知ることもなかったことなので、計３回の被爆体験を聞くことができたのは貴重なことだと改めて感じた。話をする際に気をつけることとして「被爆体験者が伝えたいことを尊重する」という話をされていたが、原爆が落ちた瞬間を表現する「ピカッ！」の大きな声は印象に残った。現在、被爆体験・戦争体験を残していく方法はいくつかあるが、その中でも生の人間が話を通して伝える伝承は、とりわけ人に伝える力が大きいように感じた。教師になったら、一度は生徒に聞かせたい。***また、海外との違いについて、地域によって平和の認識の違いがあり、そもそも平和が何かを考えたこともない地域もあることに驚いた。国際平和は自国だけでは成り立たないため、こうした視点も必要だと思った。***	実際に、自分とほぼ同じ年齢の人が交流証言者として、被爆体験を伝承しているのを目の当たりにして、戦争を体験した人が少なくなる中でもしっかりと次の世代へとつながっているように感じた。被爆体験の話の内容から学ぶのは当たり前であるが、こうした若い世代が被爆体験の伝承に取り組んでいることを知ること自体が学びになると感じた。また、質問の答えとして、聞く側（学校側）の要望するトピックに合わせて話しているということを言っていたが、１人の被爆体験者の話の中からトピックに合わせて選ぶというのは相当聞き込んでいなければ難しいことだと思った。また、佐々木さんの講話の資料と比べ、水谷さんの資料が少ないことも印象に残った。資料が多ければよいとか、少なければダメとかではなく、聞いている人に伝えたいことが伝えられるかが最も大切だと思った。
6	今年で四度目のお話を聞く機会だったが、何度聞いても戦争の悲惨さ、原爆が広島の人々に与えた惨禍に心が苦しくなった。実際に原爆の被害に遭われた竹岡さんの話を、佐々木さんからお話ししていただいたが、竹岡さんが実際に離されているかのような、リアルさがあったし、竹岡さんの平和への願いも感じることができた。 生の声で伝えて頂いたおかげで、平和の大切さ、尊さを改めて感じることができた。***自分は教師になろうとしており、これからは今回お話ししてくださった佐々木さんのように、平和の大切さを伝えていく立場になる。そうした際には、自分の声で、戦争の悲惨さや、平和な生活を築くことに努力する大切を伝えていきたいと思った。***ありがとうございました。	自分はまだ、戦争が人々に及ぼした惨禍や、平和に向かって努力することの大切さを、誰かに教えられる立場だったが、自分よりも若い人が、それらを教える、伝える立場になって実際に活動していることに、感心させられたと同時に、自分もその立場にならなければと刺激を受けた。子供に教えることが多いということだったので、自分も教師として子供に伝えるときの参考にさせて頂こうと思って聞いたが、ゆっくり話していたり、声色も場面によって変えていたりと工夫されていた。そこから、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを知ってもらうためには、ただ、実際にその話をするだけでなく、相手にどうしたらしっかりと理解してもらえるかを考えて、伝える工夫をすることが大事だと感じた。今回は、貴重なお話、ありがとうございました。

7	広島市の被爆体験伝承のお話を聴くのは２回目であるが、やはり生々しい体験であるということが個人的に１番に抱いてしまう。戦争の悲惨さを伝えるには、戦争全体の被害の側面と個人の被害体験の側面の両方が必要であると感じる。この被爆体験伝承は勿論後者であり、実際自分もこの講話を聴いて「戦争は二度と起こしてはならない」という気持ちになった。 また、伝承の観点から考えると、語りをするにしても人の気持ちを動かす語りと言うものが必要になってくる。今回語りをしてくださった方は非常に上手い語りだったので伝えようとしていることをまざまざと感じ取ることができたような気がした。 非常に貴重なお時間を頂きありがとうございました。	***今回の講話は同世代の方だったのだが、非常に上手な語りで、更に堂々とされていたので教育者を目指す身として見習いたい部分がたくさんあった。*** ***個人的に一番驚いたことが、私たちの世代の人が、「伝承者」として活躍していることである。全くと言っていいほど戦争と縁のない生活を過ごし、戦争に対するイメージは今まで学校や講話で聴いてきた戦争体験からしか得ていないのにも関わらず、まるで自分が体験したかのような語りができていて素晴らしいと思った。*** 実際の語りでは、長崎市の被爆について個人に焦点を当てた内容となっており、こちらも広島の被爆体験と同様に生々しさが非常に印象に残った。広島・長崎の被爆体験は後世に伝えていき、戦争の悲惨さを「戦争全体」と「個人の体験」の両面から伝承していく必要があると思った。
8	講話では、被爆の恐ろしさについて具体的に説明していただいた。講話では、被爆による後遺症の話があった。年をとってからや赤ちゃんにも後遺症が残るという話を聞いた。後遺症の話の時に佐々木さんが「国のために頑張っているのに何で死ななければならないのか」と言った言葉がとても印象に残っている。国民は、戦争の影響で国のために厳しい生活をしているのに、戦争によって被害を受けている。そんな事はあってはならないことだと強く思った。 この歴史を次世代に継承する必要がある。継承していくためには、真実を知り、伝えてこれを継続していく必要がある。***自分は教師を目指しているので学校教育でこのような歴史をこどもたちに伝えていきたい。戦後80年が経った現在、実際に戦争体験をした人達はかなり減ってきている。これからは、戦争について話を聞くだけでなく、伝えていく主体としてもなっていかなければならない。そのために、これからも学習を進めていきたい。***	水谷さんと自分の年齢が同じだったので、親近感を持ちながら話を聞くことができた。戦争に関して、他の授業でも勉強してきて、自分たちも戦争についての歴史を次の世代に継承する必要があることはわかっていた。そのため、同じくらいの年齢で、実際に継承に携わっている人がいることを知り、自分も何かしなければと言う気持ちになった。水谷さんの語りは様々な工夫がされていると感じた。抑揚があったり、感情のこもったしゃべり方をされていて、聞き手が想像しやすいと感じた。また、こどもに話す時の工夫として、話を聞かせるだけでなく、イラストを用いたり、対話形式にしたりすることを上げていた。これは、自分が教員になったときに子どもに対して話す時に参考にしたい。 戦争体験を語るために、戦争体験をした人たちが何を一番伝えたいのかについて強調し、伝えたいことを聞くといっていた。戦争を体験していない私たちの世代が未来に戦争体験を引き継いでいくためには、これが最も重要だと感じた。先人の思いを未来へ引き継ぐことで、二度と戦争が起きないような日本になってほしいと思った。
9	小学校や中学校では話すことができない原子爆弾の被害を鮮明に聞いてみて、最初は驚きとともに恐ろしさを覚えた。語り手の方の話し方も相まって恐ろしさを感じたが、ただ恐ろしいで終わらせてはいけないことだとも同時に感じとった。戦争といった理不尽な暴力はあってはならないものであり、現代を生きる私たちは起こさせてはいけない。そのために何ができるかを考えることは教育学部の自分が教職に就いたときに生徒に教育する立場なので、重要であるなと再確認する機会になった。	まず始めに自分たちと同世代の人から話を聞くということで積極的にこういった講演会に参加、発表されている姿勢を見て、自分も参考にしなければいけないなと感じた。発表内容では実際に原爆を体験した人からの話を聞いて水谷さんがそれを自分たちに伝えてくれるといった形だったが、こういう風に戦争体験は伝達していくのだなと聞いていて実感した。
10	今回の講話を聞いて、原爆の脅威として熱線、爆風、放射線の３つがあることがわかった。私たちは原爆が投下された当時の広島の方々の苦しみや被害について注目しがちであるが、今回の講話を聴いて、放射線という現在まで被爆者の苦しみが続く脅威を忘れがちであると思った。佐々木さんのご主人が、多重癌という原爆症で亡くなられたということを知り、原爆の爪痕は、一時的で、その後消えてしまうものではなく、どこまでも続いていくものであり、昭和20年８月15日の終戦というのは、言葉だけのものであると感じた。また、***佐々木さんのお話の中で、それぞれの国や日本の中でも地方によって平和の感覚が違うということ、また、「平和は学ぶものなんだ」と考える人もいるというお話が印象的であった。平和とは何なのかということや、平和に対する価値観が違う中で、被爆体験の伝承を聴いて聞き手にどのようなことを考えてほしいか、どう聴いてほしいかということを意識した語りが重要だと思ったし、被爆体験の伝承は、語り手だけではなく、聞き手も大きな役割をもっていると思った。***私は教師を目指しているので平和教育を行う際にこの点を意識して実践していきたいと思った。今回は２度目の講話だったが、今回お聴きしたことをそのままにしておくのではなく、自分が今回、学生であり、教師を目指す者の立場の聞き手として伝承に被爆体験について考えたことを私はどのように生かしていくべきかを考えていきたいと思った。	水谷さんが、池田さんから聴いたお話を聴いて、印象に残ったのは、黒い雨の存在と、戦災孤児についてである。黒い雨とは原爆投下後に降る放射性物質を含む黒みがかった雨のことであるが、つい先日、広島で黒い雨を浴びて健康被害を受けたと住民が訴えた裁判で広島高裁が原告全員を法律で定める被爆者と認め、原告に被爆者健康手帳を交付することとなったというニュースがあった。広島の黒い雨に焦点が当たっていたが、長崎でも同じように黒い雨によって苦しんだ方々がいたということを忘れてはならないと、水谷さんのお話を聴いて思った。また、戦災孤児という言葉は、今まであまり聞かなかったが、原爆によって当時の子どもたちが親を亡くし、戦争だけではなく、孤独や不安と戦いながら生きていたということ、原爆による身体的な被害だけではなく、精神面での被害も計り知れないものであったということを実感した。佐々木さんのお話と同じように原爆の被害はその当時だけのものではなく、経験した人の一生涯にわたって続くものであると思った。また、水谷さんが同年齢であり、被爆経験のある方からお話を聞いたことをもとに小学生を中心にその伝承を行っているということを聞き、私も今回お聴きしたことを教育者の立場としてどう子どもたちに伝えていけばよいかを考え続けていきたいと思った。
11	当時の写真や、印象的な効果音とそのタイミングなど、当時の状況を自分なりに想像し、まだまだ不十分だとは思いますがその悲惨さを知ることができました。今生きている日本では戦争はもちろんなく、体験したこともないため、「平和」について改めて考えていくことは難しいですが、こうした戦争の中で、戦地に行った人だけでなく、一般の人々も戦争に協力し、様々な犠牲があったことが今の「平和」につながっているということを強く感じました。戦争の影響は、現在でも外国との関係や被爆者など問題として残っているものもあり、そうした問題を考えていくためにはやはり教科書だけでの学習では不十分だと実感しました。教科書には載っていない事実や当時の状況を知り、現在の「平和」はどう創られていったのか、様々な問題に対してこれからを生きる私たちはどうしていくことが必要なのかを考えるきっかけとなりました。	私自身、「平和」が当たり前だと感じてしまっているなと今回の講話を聞いて強く感じました。今の「平和」で幸せな日常の背景にあった事実や犠牲を知り、改めて今の自分の生活は当たり前ではなく、考え直す必要があると思いました。しかし、当時の状況を想像はできても、現在の世界とは違いすぎて、感情移入することは小学生にとっては難しいのかなとも感じました。学校では教科書や戦争遺跡など、様々な形で戦争について学習すると思いますが、やはり「自分事」として捉えることは簡単ではなく、実際に私もできていないと思います。これからの「平和」について考えていくためには、戦争について、「自分事」として重く捉えていくことは必要なことだと感じます。そうした中で、実際に体験した方のお話を聞き、さらに今回のように年の近い方が話すことにより、子どもにとって戦争はどんなものであったか考えやすいと思いました。

12	広島市の佐々木さんのお話を受けて、わたしは「『被爆体験伝承者』として戦争体験を間接的に継承する意義はどのようなものだとお考えですか」と質問しました。佐々木さんはそれについては私たち聞き手がどのように受け取るかが大切だとしながら、やはり生の声で継承することに意義があるのではないかとおっしゃいました。現在では広島の被爆体験伝承者や長崎の交流証言者などによる継承のほか、例えばNHK戦争証言アーカイブスのように、戦争を直接体験された方の証言動画をアーカイブ化し保存し継承しようとする動きもあります。語り部の方々による継承にも、証言動画にしても、それぞれの良さがあることと思いますが、私たち若い世代は、YouTueやSNSなどのネット上のコンテンツを通して学習することになれている世代ですし、このコロナ禍であればなおさらその傾向は強いと思います。だからこそ、NHK戦争証言アーカイブスなどのネット上のコンテンツなども活用して、どんどん戦争について知っていく必要があると感じます。ただ、語り部の方々の講話にしても、証言動画にしても、それを聞いて終わりにしてはいけないと思います。先日、同じ研究室の同級生が「継承は目的ではなく手段である」と話していました。本来の目的は戦争を二度と起こさないことや、戦争の悲惨さを後世へ伝えることだと思います。継承の方法は様々ありますが、それらを受け取る側の私たちが、それらを上手に取り入れながら、戦争自体や戦争を二度と起こさないためにどうすればよいのかなどを知って、次の世代へと伝えていくことが大切なのではないかと感じました。	***交流証言者の水谷さんは私たちとほぼ同年代の方ということもあり、どうして交流証言者になったのか、どのような語りをされるのかなど、様々なことに興味を持ちながら講話を聴きました。お話を聞く中で、若くして交流証言者となり、戦争の悲惨さや平和の尊さを多くの人に伝えている水谷さんの熱意が伝わってきました。*** もうすぐ戦後76年がたとうとしています。戦争体験を語れる方を終戦時10歳以上の方とすれば、その方々の人口は現在日本の全人口の5パーセントにも満たないそうです。今後も年々その割合は減少していくでしょうし、だとすればやはり私たちのような若い世代が戦争のことを語り継いでいかなくてはならないのだと思います。そのためには私たち自身がもっと戦争について知る必要があると思います。私は今3年生なので来年も講話を聴く機会があると思いますし、NHKの戦争証言アーカイブスなどでは戦争の証言動画を視聴することができます。様々な機会やツールを活用して、戦争について知り、後世へと引き継いでいく準備をしていく必要があるのだと強く感じました。
13	今回のお話を聞いて改めて、戦争の記憶を伝えていくこと、特に若い世代に伝承していくことが最も意味を持つのだと感じました。今こうしている間にも戦争の記憶を直接語ることが出来る人は減少をしているという問題を抱えている中で、被爆体験者の方からの継承を待つだけではなく、若い世代が能動的に戦争について調べてみたり、体験者に話を聞いたりする自発的な姿勢をもつことが求められるのではないかと感じました。それは口にするのは簡単ですが、実現するのはなかなか難しいというのも事実であると思います。戦争の記憶を継承するために何が必要なのか、学校教育の場ではどのような取り組みが今後求められるのか考えていきたいと感じました。	今回の自分たちのほとんど年の変わらない水谷さんが交流証言者として活動されていることはとても素晴らしいことであると感じました。戦争の記憶を継承していく活動を活発化され、より多くの人に戦争について知ってもらうために、水谷さんのように若い方が率先して行動しているということは大きな意味を持つことであると思います。戦争の記憶を継承していくうえで、小中学生へ伝えていくことは特に重要であると思います。その中で大学生などの年の近い人が学校を訪れて、当時の様子を真剣に語る姿は児童や生徒にも印象深く残るものがあるのではないかと思いました。継承の方法の一つとして有効なものであると感じました。
14	***今回の講話を聞いて、平和の捉え方はそれぞれの国で異なるということが印象に残りました。日本では、平和主義が憲法の基本原理とされたり、教育において平和教育が行われたりと、平和について触れたり考えたりする機会が多いと思います。しかし、他国では平和について考える余裕がなかったり、同じ平和という概念でも、各国で捉え方や考え方が異なったりするということでした。そうなると、平和についての捉え方や考えの違いが摩擦を引き起こし、対立を生む要因となってしまう可能性もあると思います。そのため、私達を含め各国が平和について話し合い、世界が目指す平和像というものを共有していく必要があると思います。しかし、世界が共通して目指す平和像というのは、すぐに見つかるものではありません。粘り強く平和について議論する必要があります。その議論や対話の積み重ねが、平和への道標となるのではないかと思います。***	水谷さんの、より多くの人に原爆が投下されたという事実を知ってほしいという思いが印象に残りました。今年で終戦から76年が経過し、戦争を実際に体験した方も残りわずかとなり、戦争を体験していない世代が人口の多くを占めています。このような状況下では、やはり戦争の継承が問題となります。私は、戦争は決して風化させてはならず、後世に残していかなければならないと思っています。自分でも何か戦争を伝えることはできないかと考えたとき、私は小学校の教員を目指していますが、教育を通じて子どもたちに戦争を伝えていくことができるのではないかと思いました。しかし、自分も含め子どもたちは戦争というものを体験しておらず、切実感をもつことがなかなか難しいと思います。このことは水谷さんからの課題とつながりますが、子どもたちが自分事として戦争や平和を捉えるためにはどうしたらよいか、これから考えを深めていきたいと思いました。
15	今回は佐々木さんのおじいさん、ご主人、竹岡さんの3人のお話を聞いて、8月15日、きのこ雲の下にいた人の中でもそれぞれで違う体験、違う思いがあったということを改めて知ることができました。佐々木さんは海外の方との交流もあるというお話が特に興味深かったです。「穏やかに過ごしたい」という思いは共通しているとおっしゃっていて、異なる背景の国の人が集まって、それぞれが思っている「平和観」を共有することが当たり前の幸せの希少さや実現の困難さを捉え直すきっかけになると感じました。 ***昨年と同様、zoomでの開催となり、竹岡さんがこだわっていた「ピカドン」の話し方はきっと実際に会って聞いたほうが印象に残ったのではないかと感じました。質疑でも「生の声」という話はありましたが、どこまでが生の声といえるのか考えてみたいです。***	***水谷さんは小学生向けの講話が多いということで、語りかけるような話し方でした。特に、池田さんの体験を「私」として話すことで小学生は自分に近い存在として捉えることができるのではないかと思いました。*** 池田さんのこだわりに合わせて視覚資料を少なめに抑えたということも印象に残っています。原爆投下前後の病院の中の様子や山で過ごした時間など、想像力を働かせて講和を聴くことができたのは新鮮で、水谷さんの熱意と優しさが伝わってくる講和でした。 戦争について自分事として捉えることについての質問もさせていただきましたが、小学生を対象にしている講和の場合、原爆や放射線物質の脅威についてはどのように語るのか気になりました。
16	第一に感じたことは今回のような戦争体験の講話は何度聞いても恐ろしく二度と繰り返してはならないものだということである。佐々木さんの祖父の話で一瞬にして街が熱線によって溶けてしまう部分や皮膚の爛れた人々が至る所に闊歩しているところはやはり考えられないし想像できない。しかしこのような生々しい現実があったことにも目を向け、教えるための技術や心を身につけたいと感じた。私自身、周りには戦争について体験しているもしくは話を聞いている親戚がおらず、限られた範囲の戦争の歴史を知らないため今回のような講話会があれば参加して戦争の歴史や事実の知見を広げていきたい。また「加害の歴史」について触れていくことも「被害の歴史」と同様に重要だと感じる。戦争について考えるとほとんどの人が日本が被害を受けたものと捉えると思うが実際はそれだけではないということを伝えていきたい。	同じ歳の水谷さんがこうして交流証言者として私たちに講話をしているということにとても刺激を受けた。話を伝えていく上では語り手の伝えたいことをそのまま伝えるということを大事にして話をしている、ということを聞いて歴史というものは形を変えずそのまま継承していくことで伝わっていくものなのだと改めて感じた。ただ「伝え方」にはそれぞれ違いがあっても良いと思う。水谷さんのように話の一部を強調させて話したり、聞き手に想像させたりと語る側が工夫をしていくことが重要だと考えた。教師としても同じことが言えるのではないだろうか。教える内容は変わらない。しかし教え方には違いがあって良い。そのような考えを今回の講話で得ることができた。

17	今回の講話を聞いて、当時の原子爆弾の威力の大きさがどれだけ大きかったのかということを感じることができた。今まで沖縄での陸上戦や東京大空襲などのお話は聞いたことがあったが、今回、はじめて原爆のお話を聞き、その威力と被爆による症状にとても衝撃を受けた。また、被爆した後の被害者の劣悪な環境のお話にも衝撃を受けた。今回、私が感じた衝撃を、伝えていくことは重要だと、今回の講話を聞いて改めて感じた。 また、今回の講話で、「平和」という言葉についても考え直さなければならないと考えた。「平和」という言葉は抽象的だからこそ、その定義については人によって変わってしまうのではないかと思った。その中で、人々が協力するには、その共有を怠ってはならないと考えている。	今回の講話を聴いて、特に印象に残った言葉の１つは、「戦争の恐怖が人を変える」という言葉だった。戦時中で、特に自分の近くに危険が迫っているときは、自分の安全を脅かすことに対して、たとえそれが可能性が少なくても過剰に反応し、余裕がなくなってしまうことが分かった。また、自分が生きるのに必死であり、ほかの人のことを気にしている余裕がなくなってしまうことがあることも感じた。現在の社会では、死を日常的に感じることは減多にないが、戦時中の、特に本土爆撃などが始まってからは、死が身近に感じられるような状況であり、戦争がより日常に入り込んでいたことを強く感じた。加えて、戦争がより日常に入り込んでいたエピソードとして、子どもたちが爆弾の破片を集めていたという話も印象的だった。
18	竹岡さんの体験談をお話しいただく中で、佐々木さんの臨場感ある話し方、声色などに惹きつけられながら聞くことができた。特に印象的に残っているのは、竹岡さんが当時、友達と遊びに行くための支度をしている最中で原爆の被害にあったということだ。自分たちは日々、当たり前のように朝、出かける準備をし、目的地に行けている。その当たり前がいとも簡単に壊されるほどの核弾頭が今でも世界には沢山あるのだ、ということをより多くの人々が知らなければならず、自分が教師になったら子ども達にはどう伝えていこうか、大きく考えさせられた。「平和の花」を咲かせてほしい、という言葉も心に残っているので、まずは自分の身近な人から「平和の花」を広げていきたいと思う	まず、自分と同世代の方がこのような伝承活動をしている、ということに大きな衝撃を受けた。戦争を経験してきた人が周りに誰もいない中で、数少ない経験者の方のお話を聞き、伝えていくというとても重要な役割を担っている姿に自分も刺激を受けた。池田さんの当時のお話はとても鮮明で、資料が少ない中でも文章から想像して聞くことができた。普段は主に小学生向けでお伝承をされている、ということで、このお話を聞いた小学生はどんな感想を持ち、考え方が変わったのか知りたいと思った。お話を聞いていると苦しくなる場面がいくつかあるが、それでも目を背けることはできないので、自分ももっと当時のことに目を向けていきたいと思った。
19	佐々木さん自身の話では、佐々木さんの祖父が大砲をつくっていて意図せずに戦争の加害者となり、また戦争の加害者であると同時に広島に落とされた原子爆弾の被害者であることがとても印象に残った。原子爆弾の脅威の内の③放射線の後遺障害が残っている方が今もいて原子爆弾の怖さを知った。 佐々木さんによる竹岡さんの話では、まず、竹岡さんが「今日は徹夜だよ。はやくつくらないと。」という様に徹夜をしてまで人間魚雷をつくり、戦争に加担していることを知っていながら作り続けているのは、当時暴力での支配によって成り立っていたからということを踏まえて、「戦争」という形での暴力ではないが身近な現在でもありうる暴力の形はあってはならないと感じた。また、細かい描写によってまるで自分もそこにいるかのように感じられ、生々しい戦争の残酷さを想像することができた。原子爆弾が落ちた後の血だらけの母の腕の中の赤ちゃんが冷たかったこと、竹岡さん自身の赤ちゃんが亡くなったことからの「戦争は絶対にだめだ！原爆は絶対にだめだ！」という実際に体験しないと分からない心の底からの叫びを感じて、これは絶対に二度と起こしてはならないし、そのことを多くの人に知ってもらう必要があると考えた。 佐々木さんの旦那さんは、戦後64年後に原爆症によって亡くなった。旦那さんの「戦争がなければ」という言葉がつよく印象に残る。アメリカは原子爆弾による被害がここまで大きくなるとは考えていなかったかもしれないが、原子爆弾でこれだけの長い期間苦しめられている事実はもちろん、戦争によって多くの方々の人生を奪われてしまったことを、日本も同じく戦争によって多くの方々の人生を奪ってしまったことを絶対に忘れてはならないし、二度と起こしてはならないと考えた。	水谷さんからの池田さんの話を聞いて、最初に戦時中の暮らしの話として、夜は生活していることがバレないように電気を消して暮らしていたためとても暗く、防空壕では赤ちゃんの泣き声に怒鳴る大人がいたということを聞いて、こんな世の中でなんか暮らしたくないと思うと同時に、「戦争は人々をそこまで変えてしまうのか」と思った。池田さん自身も原子爆弾が落とされた後に背中に背負った赤ちゃんが死んでいることを知った大人が大声で泣いているところを、街の人達はいつもだったら気にかけてくれるはずなのに無視して通り過ぎていく現実から「戦争は人の心を変える」ことを知ったということを聞いて、それぞれの自分にとって、ましてや六歳の少年にとって日常が壊れていくところを目の当たりにすることはどれだけ寂しく、つらい経験だったろうかと考えた。 池田さんと同じ年のしげちゃんの話もとても印象に残った。避難した病院のベッドにしげちゃんとおばあちゃんと二人で寝ていていつもよりも狭く窮屈だったからか「じゃま！苦しい！」といっていたが、おばあちゃんは戦争によって死んでいて、最後に愛する孫に寄り添っていたからということを聞いて言葉では表せない感情になった。それからしげちゃんは戦争孤児となったが、しげちゃんは戦争がなかったら家族を失わずに済み、現在の私たちのように生きていたのだろうかと思ったが、***戦争がない、所謂平和である現在の日本に住む私たちは、これで幸せなのだろうか。平和であっても現在のわたしたちにも様々な問題や悩みがあり、「今の自分が幸せかどうか」と考えることはないかもしれない。しかし、戦争を実際に体験し、加害者・被害者となった人たちが心から願った「平和」を私たちは実現しなければならないと考えた。そのために継承が必要であることを学ぶことができた。***
20	私は今まで授業や授業内の映像資料でしか戦争について学ぶ機会はありませんでした。そのため今日のような機会はとても貴重で、実際に戦争を体験した人の話をそのまま聞くことができるというのは、授業よりもより身近にその脅威を感じました。特に実際に原爆の被害を受けた人にしかわからない熱線や爆風の話は映像で見るよりはるかに衝撃的で、仮に重傷の方に比べて自分の被害が少なかったとしても、そこから苦しんでいる人やすでに亡くなっている人を横目に避難するということを考えると精神的苦痛もかなり大きかったのだろうということを改めて感じました。貴重なお話をありがとうございました	アメリカ軍人へ聞こえるはずがない赤ちゃんの泣き声にまで敏感になっていたという当時の状況から、戦争の過酷さと被爆者の方々の必死さというものがひしひしと伝わってきました。また、***普段は小学生向けの講話を行っているということで、小学生に対しての授業づくりに参考になるようなことも聞くことができてよかったです。***「まずは戦争下の状況について知ってほしい」というお話もあったので、授業をする際には今日の講話会の内容も含めてより詳しく、子どもたちに戦争を知ってもらえるような授業をつくりたいと思いました。貴重なお話をありがとうございました。
21	今回佐々木さんのお話を聞いて、「語り」での戦争体験の共有の大切さを、実感することができました。私自身は、広島県の平和記念公園やその周辺の資料館などを実際に見たことがあり、血の付いた衣服や時が止まったままの時計や時間割表を見て、本当に70数年前に実際に会ったことなのだと感じさせられたことを今でも思い出します。しかし、今回のお話では、言葉での戦争の共有をしていただき、体験者の方と身近な方が話される言葉ひとつひとつが、重く心に響いてきました。ちょうど、夏は日本だけでなく世界の人々が、戦争の記憶を振り返る時期になってくると思います。私自身も、今年二十歳になって少し大人になった目線から、改めて戦争を振り返りをしていきたいなと思いました	***ボランティアでの証言者活動を、私たちと同世代の方がやっていることを知り、一番は驚きがありました。水谷さんは、偶然が重なって今に至っていると言っていましたが、偶然であったとしても現在その活動を使命感を強く持ってやっていらっしゃること自体が、誰にでもできるわけではないと思うので、とても尊敬の念を抱きました。*** 私たちの世代は、当然戦争の経験もしたことないわけですが、人から人へと語り継ごうとする、一人でも多くの人に知って欲しいと思いながら話している思いが、話の姿勢や話し方に現れていて、まるで本の朗読のようでした。 水谷さんに刺激を受けて、私自身もこれを機に改めて戦争に対して向き合っていきたいと思いました。
22	とても迫力があり、聞いていて、自分もその場にいるのではないかと思うくらい話を聞きいっていました。 また、話すときには、本人の意思を尊重して伝えていると言っていたことがとても印象に残りました。	私と同じ年代の人が、このような活動を行っていて、すごいと思いました。 小学生向けの内容ということで、話し方も小学生に話すのと同じように話していて、自分が小学生と関わる際に、どのように話せばいいのか、わからなかったので、とても参考になりました。

Akita University

23	今回の講話を聴いて、改めて戦争について知ることや平和について考えることの意義があると感じた。私自身広島の原爆資料館に行ったことがあり、そこで見る原爆によって焼かれた三輪車や洋服なども印象に残るが、語り部の方が生の声で当時の様子を語るとよりいっそう戦争の残酷で悲惨な状況を感じ取ることができた。ただ生きているだけで平和というものはつくられるのではなく、一人ひとりの働きかけや意識によって平和がつくられていくため、積極的に戦争や原爆について本や講話などの機会から知っていこうと思った。機会を与えられて知るのではなく自分から機会をつくっていく。また、***「伝えたい」という気持ちが大切であることを学び、将来教師となった時に戦争を経験していない子どもたちに対して、自分なりの言葉で伝えられるようにしていきたい。***	自分と同世代の方が「交流証言者」として社会に働きかけている姿を知り、自分にとって刺激になった。ボランティアがきっかけであるとお話ししていたので自分も今後興味のあるボランティアに参加して、経験を積んでいきたい。また、語り部の方でも当事者から聞いた内容や戦争当時の感情はそれぞれで一人ひとりに物語があることを感じた。***当事者の方が言っていた「今の日本の平和は血と涙の上にできている」という言葉がとても印象的で、平和であることを当たり前に感じて生活するのではなく、長い時間をかけてつくられた平和の中に生きているということを普段の生活で意識することが大切だと思った。唯一の被爆国に住む私たちだからこそ、発信できるものであったり伝えられるものがあるのではないかと感じたので、戦争や原爆など当時の状況を知ることから始めていきたい。***

・2021（令和３）年７月22日の講話直後に記入してもらったアンケートから作成。
・原文全部掲載。文字強調筆者。本文中の引用個所を強調した。